

4人の震災被災者が語る現在^{いま}*)、**)

—語り部活動の現場から

矢守克也 京都大学防災研究所 (～03年3月:奈良大学社会学部)
Katsuya Yamori Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University
(-03/2003: Department of Psychology, Nara University)

要約

本研究は、4人の震災被災者——庄野さん、浅井さん、長谷川さん、市原さん——が、阪神・淡路大震災の体験を語り継ぐための語り部活動（「語り部グループ117」）において、小中学生を対象に展開した語りを分析したものである。分析にあたっては、語りの「内容」よりも、むしろ、語りの「様式」に注目し、かつ、語り手個人の心理的特性よりも、むしろ、語りをめぐる集合性の動態に焦点をあてた。この際、個々の語りの「様式」を規定する存在として〈バイ・プレーヤー〉なる分析概念を提起した。その結果、4人の語り手は同じ震災体験を語っているが、その様式がまったく異なっていることが見いだされた。具体的には、庄野さん、および、浅井さんの語りでは、語りの内部に登場する特定の人物が〈バイ・プレーヤー〉の役割を果たし、語り手本人と〈バイ・プレーヤー〉との間で生じる視点の〈互換〉が語りの基本構造を規定していた。他方で、長谷川さんの語りでは、聞き手が〈バイ・プレーヤー〉の役割を果たし、市原さんの語りでは、「神戸の街」という集合体全体が〈バイ・プレーヤー〉となっていた。同時に、4つの語りとも、仮定法の話法によって視点の〈互換〉が聞き手へと展開していた。さらに、〈バイ・プレーヤー〉のあり方にあらわれた語りの「様式」のちがいが、各人のライフストーリーの構成様式のちがひ、ひいては、生活世界の再構造化に見られるちがひを反映していること、および、語り手のみならず、聞き手や語りの対象となる人物、事物などをも包含する語りをめぐる集合性の動態分析を通じて、語りの固有性へのアプローチが可能となることを示唆した。

キーワード

語り部、ナラティブ、バイ・プレーヤー、ライフストーリー、自然災害

Title

The Narrative Aspect of Story Telling: The Way Disaster Victims Narrate Their Stories

Abstract

The present study analyzed the transcripts of oral narratives that were told, as stories, to school children by four disaster victims of the 1995 Kobe Quake. The story tellers are members of a voluntary group, called Group-117, whose aim is to pass such experiences on to the next generation. The analyses of the narratives focused on the ways the narrators told the stories rather than on the narrative content, using narrative analytical concepts such as "by-players" and "exchange of viewpoints." The results showed that, in the narratives of Ms. Shono and Ms. Asai, where a particular person played the role of a by-player, the exchange of viewpoints between the narrators themselves and their respective by-players underlay the basic structure of their narratives. In contrast, it was the audiences in Mr. Hasegawa's story, and "Kobe City" in Ms. Ichihara's story, that played the role of by-players. In all four narratives, audiences were also involved in the exchange of viewpoints due to the prevalence of a subjunctive mood during the narration, even when audiences themselves did not act as by-players.

Key words

story teller, narrative, by-player, exchange of viewpoint, natural disaster

1 はじめに — 6つの基本的視点

本研究は、4人の震災被災者が、阪神・淡路大震災の体験を語り継ぐための語り部活動（「語り部グループ117（以下、^{ぐるぶ・いちいち・なな}G117）」）において展開した語り（ナラティブ）を分析したものである。はじめに、本研究は、以下に列挙する7つの基本的視点を有していることを明らかにしておきたい。これらは、本論文において、常に援用しながら論述を進めるものではないが、順次紹介する個別的分析・考察において、その理論的・方法論的基盤となってそれを支える視点である。

第1は、「語る現在」という視点である。論文題目が示す通り、本研究は、語りの対象となっていると考えられる「過去」よりも、むしろ、語りを展開されている「現在」に焦点をあてる。別の言い方をすれば、本研究では、語りの「内容」よりも、むしろ、語りの「様式」に注目した分析が試みられている（大橋・森・高木・松島、2002）。なお、G117における語りの「内容」については、Yamori (in press)、矢守（2001a）において、いくつかの分析結果が報告されている。

第2は、「ライフストーリーの再構築」という視点である。本研究では、震災被災者による語りを、当事者によるライフストーリーの再構築作業の一環として位置づける（やまだ、2000a）。さらに限定すれば、家族や身近な友人の喪失、あるいは、自宅の破壊という、人生（個人史）における危機的境界線上を移行（南、1995）しつつある語り手らが展開するライフストーリーの再構築作業について、短期的視点（例えば、心的外傷の回復過程という視点）からではなく、長期的視点（例えば、南（1995）が言う「生活世界の再構造化」という視点）から分析・考察を試みる。

第3は、「語りをめぐる集合的動態性」という視点である。本研究では、語り手個人の心理的特性ではなく、語りをめぐる集合性——語り手のみならず、語りの対象となる人物や事物、さらには、聞き手、語りの現場を設定した人々など——の動態に焦点をあてる。言い換えれば、本研究の分析対象は、基本的に一人の

語り手による単独、かつ一方向的な語り（発話）ではあるが、そうした語りの表面的形態とは反対に、そこに、「展開され拡張された対話関係を内に含み込んだ言葉」（茂呂、1991、p.204）を読みとり、同時に、語り手を「状況の中の人」（南、1995）として定位する。

第4は、「活動現場の社会的構成」という視点である。第3の視点と関連して、数人の被災者が結成した語り部グループが提供する活動の現場が、震災という過去の出来事を知るための妥当な手段、リソース（上野、1999）として、社会一般に受容されている事実自体に着目する。すなわち、過去と出会うための「儀式化されたフォーム」（佐々木、1991）としての語り部活動に着目する。

第5は、「アクション・リサーチ」（Lewin, 1977）という視点である。本研究の実施にあたっては、筆者自身がG117のメンバーとして活動に参与している。そのため、観察・分析対象となる語り部活動そのものに対して、——少なくとも部分的には——筆者（研究者）自身が実質的な影響を及ぼす形式で活動が展開されてきた。すなわち、研究者と現場の人々との共同実践研究である点が、本研究の形式的な特徴をなしている。

第6は、「定量的・定性的分析の併用」という視点である。語りの分析にあたって、本研究では、定量的分析と定性的分析が併用される。正確に記せば、第三者による再検証が相対的に容易なデータ（主として、定量的なもの）が語りから抽出される一方で、G117の参与者である筆者だけが、長期（3年あまり）にわたるメンバーとの共同的な実践活動を通して知りうる情報、または推定しうる事項（主として、定性的なもの）も、——当然、第三者から見たその信頼性に留意した上で——考察に供される。

最後は、「生成的継承」という視点である。本研究は、やまだ（2002）が、論理実証主義に依拠する心理学研究をこれまで方向づけてきた仮説検証プロセスに代えて、質的な心理学研究を先導し、かつその成果を蓄積するための基本原理として提起している仮説の「生成的継承」プロセスの一端を担おうとする。具体的には、広い意味でライフストーリーに関わる先行研究群（例えば、南、1995；やまだ、2000a、2000b；大橋ら、2002；桜井、2002；浅野、2001；Wertsch、

1995 ; Bakhtin, 1988 ; Bruner, 1999) によって提出されたいくつかの仮説の生成的継承を目指す。

II 「震災語り部グループ 117」

6400 人を越える人々の命を奪った阪神・淡路大震災（1995 年 1 月 17 日）から 5 年近くを経過した 1999 年 12 月、神戸市内で、「震災語り部グループ 117 (G117)」が発足した。G117 は、神戸市内で被災、避難所、仮設住宅での生活を経て、現在は、震災復興住宅に住む長谷川忠一代表（発足当時 56 歳）が呼びかけ人となって、震災体験を語り継ごうと結成された市民グループである。G117 は、被災者有志による任意団体であり財政的な基盤もまったくない。それでも、「震災を忘れて欲しくない。地震を体験していない人にも、自分の経験を語り継ぎたい」という思いをもった代表をはじめとするメンバー（現在 12 名）は、精力的な活動を続けている。メンバーは全員が被災者であり、うち何人かは、地震によって住まいを失い、また家族を亡くしている。なお、筆者も、発足時からのメンバー（副代表）である。

G117 は、月 1 回、勉強会を開きながら、語り部の活動を行っている。勉強会は、活動計画の策定、語りの内容に関する相互検討のための場である。活動対象は、主に小中学生であり、総合学習、あるいは、関西への修学旅行の一環として組み込まれることが多い。また、活動の様子が新聞、テレビで頻繁にとりあげられたこともあり、2 年目からは、要請に応じて、先方に出向いての活動も開始している。これは「出前語り部」と称され、大阪府、奈良県、東京都、宮城県、愛媛県などで実施された。実施校はのべ 50 校にのぼり、語りを聞いた児童・生徒の数も 5000 人に達しようとしている。3 年続けて G117 による語り部を修学旅行に取り入れた小学校も存在する。もっとも、教育現場とは異なる場面で活動が実施されたケースもある。例えば、地震直後の食糧供給について調査中の研究者グループ、耐震建築に対する関心から神戸を訪れた建築業者、あるいは、訪日中のトルコ人大学生（1999 年トルコ・イズミット地震の体験者）などを対象とした

活動である。

ここで、活動の多くを占める小中学校教育における活動について、より詳細に、その内容を記しておこう。それは、一つには、本論文でとりあげる 4 つの語りも教育現場で収録したからである。もう一つには——こちらがより重要であるが——、I 節で先述の通り、本研究では、語り部という体験の記憶・継承形式が成立すること自体を考察の対象としており、ひいては、このことが、個々の語りの「様式」にも影響を及ぼしていると考えているためである。

学校現場での活動のほとんどは、先方からの要請による。学校側は、マスメディア報道、口コミなどを通じて、G117 の存在を知る。その後、実施日時・場所、形態に関する事務折衝を経て、語りの当日を迎えるという段取りになる。また、G117 は、活動実施後、すべての児童・生徒から感想文を収集して、事後の活動の参考としている。なお、感想文の内容分析をはじめ聞き手の反応に関する検討も、ナラティブ分析の重要な部分をなすと考えられるが、この点は本研究ではとりあげない。今後の課題としたい。

語り当日の具体的な活動内容は、以下の通りである（詳細は、Yamori, in press）。まず、神戸での活動の場合、G117 は、活動場所、すなわち、どこで語り部活動を実施するかを重視している。具体的には、修復されずに放置された建物、大破した埠頭を保存した「神戸港震災記念公園」、および、震災に関する学習施設（「震災フェニックスプラザ」「人と防災未来センター」）などが、主たる活動場所である。他方、「出前語り部」では、先方の学校施設が活動場所となる。この場合には、当時の資料、写真などを語りとともに利用することが多い。また、震災に関する市販の報道記録ビデオを視聴するなどの「事前学習」が教員によって実施されることも多い。

以上に集約した語り部活動の内容、形式に関して、もっとも重要なことは以下の点だと思われる。すなわち、多くの場合、「震災学習」という標題のもとで展開される語り部活動が、「命の大切さ」（家族を亡くした遺族の思い）、「助け合いの大切さ」（被災後の相互扶助、あるいは、ボランティア活動）という 2 つの事項を実感的に学ぶべき場として位置づけられる点である。この 2 点が強調される点に関しては、これまで例

外は存在しなかった。すべての実施校において、これら2点を学ばせたいという希望が教員からG117側に繰り返し提示され、かつ、児童・生徒に対して学ぶべきものとして強調される。そして、結果的にも、児童・生徒による感想文の多くがこの2点に言及する。以上の点は、G117における語りについて、それが聞かれる際の主要なコンテクストをなしており、語る側の「様式」にも少なからぬ影響を与えている。

III 語り分析の基本視点

— 語りの「様式」からのアプローチ

本論文で分析対象とする4人の語りは、いずれも阪神・淡路大震災について、それぞれの切実な体験を基に語られたものであり、その限りでは多くの共通点が認められる。しかし、個々の語りには固有の特徴も多数存在する。特に注目したいのは、語りの「内容」に見られる固有性ではなく、語りの「様式」に見られる固有性である。言い換えれば、語りの対象となっている「過去」に見られる個人差ではなく、語り部という活動が展開されている「現在」の時点における想起の様式に見られる個人差に注目したい。

なぜ、ここで、語りの様式に焦点をあてるのか。分析に先だて、その理由を明確にすることによって、分析の基本視点——語りの「様式」からのアプローチ——の妥当性を正当化しておきたい。このアプローチの背景には、主として6つの理論的潮流がある。いずれも、広い意味で、語り（ナラティブ）、および、記憶と想起に関わる研究領域——ライフストーリー研究、ライフヒストリー研究、ナラティブセラピー研究、共同想起研究、語りのポリティクス研究、供述分析研究——における最近の研究動向に由来するものである。

まず第1に、やまだ（2000a）が、ライフストーリー研究一般を視野に入れた包括的なレビュー論考の冒頭部分で、人生の物語を、その静態的構造においてではなく、物語の語り手と聞き手によって共同生成される動態のプロセスとしてとらえることの重要性を強調している。この指摘は、ただちに語りの「様式」への注目につながるわけではない。しかし、語りの「内

容」と比較してこれまで等閑視されてきた語り手と聞き手から成る語りの現場の重要性、さらに特定化すれば、その現場において生身の語り手が生身の聞き手を目の前にしていかに関わるかという語りの「様式」の重要性を強調した主張ととらえることが可能だろう。

第2に、主として、文化人類学、社会学の領域で展開されてきたライフヒストリー研究においても、語りの「様式」を重視する傾向が強まっている。例えば、桜井（2002）は、ライフヒストリー研究には、実証主義、解釈的客観主義、対話的構築主義の3つの主要アプローチが存在するとした上で、対話的構築主義の立場を重視している。この際、対話的構築主義は、「語り手が『何を語ったのか』という語りの内容にややもすると関心が集中するが、その一方で、『いかに語ったのか』と、語りの様式にも注意を払うアプローチ」（桜井、2002、p.28）と位置づけられている。

第3に、ナラティブセラピー、特に、脱構築アプローチをとるナラティブセラピーにおいて重視される「ユニークな結果」（White & Epston, 1992）も、語りの「様式」に大きく関わる。「ユニークな結果」とは、端的に言えば、セラピーにおける（自己）物語の構成の失敗——語りえないものの暴露・発見——である。しかし、それは、語りの外側に語り尽くせないものとして実体的に残存しているというよりも、「語りの内側に（しかもときにその中核部分に）、あるいは現実が今まさに構成されつつあるそのただ中に、その構成をつまづかせるようにして、姿を見せている」（浅野、2001、p.109）。つまり、「ユニークな結果」は、語りの「内容」を検討することによって、その外部に語り尽くせなかったものとして見いだされるべきものではない。そうではなく、語りの現場に内在し、浅野（2001、p.229）の言う「身体症状」、語りの変調、あるいは、Wallon（1983、p.218）の言う「自己塑形的活動」のゆらぎ、つまりは、語りの「様式」を探ることによって抽出されねばならないとされる。

第4に、記憶研究における「記憶から想起へ」の流れも、本研究で語りの「様式」をクローズアップする重要な背景の一つである。この流れは、直接的には、「共同想起（joint remembering、または、collective remembering）」の概念を提起した Middleton & Edwards（1990）に由来する。共同想起論は、その後、

わが国においても、さまざまな領域で多くの研究成果をあげているが（佐々木，1991，1996；大橋ら，2002），その基本姿勢は以下のようなものである。「われわれが過去について対話する場合は，単に個人の過去についての知識が寄せ集められ，集団的に継ぎ合わされる場ではない。…（中略）…彼ら [Middleton と Edwards（引用者）] はまずこの過去を現在に呼び起こすための社会的儀式の記述からはじめる」（佐々木，1991，p.106）。ここで知識と称されているものが語りの「内容」に，社会的儀式と称されているものが語りの「様式」に，それぞれ対応することは，容易に見てとれよう。

第5に，第4の論点とも関連して，「語りのポリテイクス」に関わる諸研究も重要である（Plummer, 1998；小林，1997など）。つまり，さまざまな個人的な経験の語り（自伝や自分史）が生産され，流通し，消費される社会的文脈に関する研究である。本研究に即して言えば，被災体験について語るという語り部活動が社会的に受容されている事実そのことを問う立場である。こうした視点に立つ研究も，当然，語りの「内容」のみならず「様式」を重視することになる。なぜなら，自己の体験を公的に語る（公刊する）という活動が有する政治・社会・文化的意味づけについて検討するためには，当該の語りがそれぞれの現場においてどのような形式のもとで提供されているかという語りの「様式」に配視することが避けられないからである。

本研究が，語りの「様式」に焦点をあてる最後の理由は，大橋ら（2002）が精力的に展開してきた供述分析研究の成果と関連する。語り口（「語り方」，「身構え」，「語りの文体」といった用語で呼称されることもある）を重視する彼らの研究アプローチ（スキーマ・アプローチ）は，上述の共同想起（共同構成）論を踏まえつつも，それが究極的には免れえない「相対主義」——（共同）想起の数だけ過去の現実が存在するのか——の桎梏を超克するための方向性として提示されている。彼らの供述分析は，犯罪捜査，刑事裁判というフィールドにおいて直面せざるをえない「たしか過去の」への遡行の困難を背景としている（高木，2001；森，1995）。その上で，「相対主義」の立場を認める限り決して一つには特定化できない「たしか過去の

去」との比較照合を通して現在における想起を検討する途が断たれたとき，彼らは，その隘路を共同想起論に拠って相対論的に迂回する方途を忌避する。むしろ，現在における想起の現場をそれ自体として把握すること，具体的には，想起に伴う語りの「様式」に焦点をあてることによって新たな地平を拓こうとする。

以上の6点を踏まえて，4人の震災被災者が被災体験を語る現在，すなわち，語りの「様式」へとアプローチしていくことにしよう。

IV 4人の被災者の語り

1. 語りの現場

本論文で検討対象とするのは，G117のメンバー4人（庄野ゆき子さん，浅井鈴子さん，長谷川忠一さん，市原聡美さん）の語りである。庄野さんと浅井さんの語りは，2001年12月7日，奈良県大和郡山市立郡山中学校体育館における活動で収録，長谷川さんと市原さんの語りは，2002年1月17日，大阪府高槻市立桜台小学校視聴覚教室における活動で収録したものである。以下，多くの活動（録音・録画データ）から，これら4つの語りをとりあげた理由を5つ列挙し，あわせて，語りの収録状況の概略説明としたい。

第1に，この4人は，メンバーの中でもっともアクティヴなメンバーであり，4人が提供する語りG117を代表する語りだと考えられる。分析対象とした2002年1月までに行われた活動に登場した，のべ76人の語り部中，この4人で55人分（約72%）を占めている。

第2に，これら4つの語り，ほぼ同じ時期（震災発生から約7年の時期）に収録されたことも重要である。同じ語り手であっても時間経過にともなって，語りの内容は少しずつではあるが変化するからである。もっとも，この点は，——語り部たちは，基本的には同じ体験を繰り返して想起し語るのだから——想起研究の原点の一つである Bartlett (1983) の反復再生法の観点，語り手個人の長期にわたる自己変容過程（例えば，Gergen, 1985），ライフストーリーの再構築過程

(例えば、やまだ, 2000a), 生活世界の再構造化過程 (例えば、南, 1995), さらに、中高年者の生涯発達過程 (例えば、南・やまだ, 1995) などの観点に立ったとき、興味深い研究対象となるであろう。しかし、本稿では、この語りの時間変化に関する諸問題に触れる余裕はほとんどない。VI-1 項で今後の方向性を展望することとどめ、本格的な検討は今後の課題としたい。

第3に、いずれの語りとも、ほぼ同じ形式で提供された。まず、4つの語りとも、被災地内での活動ではなく、「出前語り部」、つまり、先方の学校施設における1対多形式の語りである。聞き手は、中学2年生の生徒約240人、教員数人(郡山中学校)、小学4年生の児童約80人、教員数人(桜台小学校)であった。次に、いずれの場合も、当日は、教員による挨拶・導入、語り手と司会者(筆者)の自己紹介、語り本体、質疑応答、教員の挨拶、以上の順で活動が進行した。さらに、両校において、語り部活動に先だって、児童・生徒が震災の報道記録ビデオ(同じもの)を「事前学習」として視聴している。この点も、4つの語りにも共通している。

第4に、上記第3の事情と関連して、4つの語りともデジタルビデオによって収録され、データの状態がよい。これは、非常に実際的かつ些細な理由ではあるが、重要である。なぜなら、被災地での活動は屋外でのそれを基本にしており雑音も多い。加えて、複数の語り手と複数の聞き手による雑談形式となることも多いため、良好な録音は事実上不可能だからである。

最後に、活動の舞台となった郡山中学校、桜台小学校における個別的な背景について、後続の分析に関連する範囲内で簡単に記しておこう。郡山中学校については、活動の約1年前、聞き手と同学年の生徒が校舎から転落して亡くなるという事故があったことに触れておかねばならない。この不幸な事故を一つの契機として、同校では「命の大切さ」を考えるためのさまざまな取り組みが展開され、G117もその一環として招かれた。次に、桜台小学校については、震災直後、長谷川さんの避難先に、当時同校教員であった後藤先生(現在は、退職)が、5年生の担任クラスの児童が書いた寄せ書きを持参したことが背景にある。長谷川さんは、その後、この寄せ書きを大切に保管し、活動当日(あの日からちょうど7年目の1月17日)、それを

持参の上、語りに臨んだ。また、当日は、後藤先生も語りの場に招かれ同席している。

2. 4人の語り部

庄野ゆき子さん(67歳(以下、年齢は活動時点)、女性)は、神戸市東灘区で被災。全壊した自宅の下敷きとなったが14時間後に救出された。しかし、重傷を負い入院、幸い命に別状はなかったものの、長期間のリハビリ生活を余儀なくされ、右脚には今も痺れが残る。そして、隣室で寝ていた長男の聡さん(当時29歳)は、亡くなった。現在は、同じ場所に再建した自宅に一人暮らしであり、近くに住む長女やお孫さんとの時間を大切にしている。G117には、グループが作成した語り部募集のチラシを見て、2000年4月から参加。その後、仕事の合間をぬって活動に参加、常にグループの中心メンバーの一人として活躍している。

浅井鈴子さん(47歳、女性)は、神戸市東灘区で被災。全壊した自宅の下敷きとなったが、数時間後に救出された。ご主人と2人の息子さんは無事だったが、一人娘の亜希子さん(当時10歳)は、全身圧迫によるクラッシュ症候群に陥り、震災から24日後に亡くなった。亜希子さんへの思いを綴った文章は、その後、震災教育のための冊子にも掲載され、通っていた小学校の近くにはモニュメントも建てられた。現在は、東灘区外に転居し家族と暮らしている。G117には、庄野さんと同じく、語り部募集のチラシを見て、2001年3月から参加。仕事のかたわら、中心メンバーの一人として活躍している。

長谷川忠一さん(57歳、男性、G117代表)は、神戸市中央区で被災。住まいのマンションは全壊した。幸い、大きな怪我はなかったが、近くの避難所で、約半年間、不自由な生活を余儀なくされた。この間、避難所のリーダーをつとめ、地元行政機関やボランティア団体との窓口をつとめた。その後、仮設住宅での生活を経て、現在は、震災復興住宅で一人暮らし。1999年、「震災の風化に危機感を覚え」、仮設住宅時代の仲間とともにG117を発足させた。その後、一貫して、代表の立場にあって、体験を語り継ぐほか、小中学校、地元行政機関、マスコミとのパイプ役にもなってきた。

市原聡美さん（59歳、女性）も、神戸市東灘区で被災。自宅は全壊した。幸い、自身と家族に大きな人的被害はなかったが、多くの知人が亡くなった。その後、避難先での暮らしを余儀なくされ、その間、PTSDと診断され病院通いを続けた。「大好きな」神戸に戻ってきたのは、震災後1年を経た95年12月末。現在は、再建した自宅で暮らす。数年後、被災した遺族が各所のモニュメントをめぐる交流イベントに参加し、「自分よりはるかに辛い立場の人たちが前向きに生きるのを見て、吹っ切れた」。G117には、親しくしていた庄野さんの誘いに応じて、2000年9月から参加。仕事や地域活動のかたわら、グループの中心メンバーの一人として活躍している。

3. 語りの内容要約

表1は、4人の語りのアウトラインを集約して示したものである。紙幅の制約から、語りのすべてを採録することはできず、ほんの一部を抽出したに過ぎない。重要と思われる発話は、この後、個々の分析・考察において必要に応じて具体的に紹介することにする。また、表1で、4人の語りは、いくつかのセクションに分割されている。これは、語りの内容、および、発話の間（ま）を手がかりに、筆者が整理用に設けたものに過ぎない。セクションの表題も、筆者が付したものである。なお、すべての発話内容、および、発声上の特徴、語り手の表情・動作、聞き手の反応などの付加情報を盛り込んだトランスクリプトは、矢守（印刷中）に提供されている。

V 語りの分析

1. アウトライン——〈バイ プレーヤー〉の概念

本節では、4人の語りの特徴を順に分析する。分析にあたっては、語りが有する特徴を、既成の分析枠組みを超越的に適用することなく、語りを展開された具体的な場（先述の通り、筆者自身が同席）を踏まえ、かつ、録画された個々の語りを反復視聴しそこに内在

することの中から、それぞれの語りの様式をよく表現する特徴を抽出することを試みた（大橋ら、2002）。すなわち、以下の分析では、複数の語りを横断的に位置づける分類次元が予め設定されているわけではない。そのようなものが想定されるとすれば、それは、分析の結果として、その存在が示唆されるべきものである——実際、本研究では、そのような可能性の一端を示すことになる。とは言え、こうした漸進式的分析プロセスを逐一後づけていく2～5項の記述は見通しが悪いことを恐れる。そこで、具体的な分析に先だって、その概要を先取りして略述しておきたい。

語りの「様式」を規定する要因として、語りの〈バイ・プレーヤー〉なる概念が提起される。〈バイ・プレーヤー〉とは、語りの「内容」に登場する（重要）人物という意味ではなく、語りの「様式」そのものを規定している存在（特定の人物とは限らない）のことである。この点に関して、語りの内部に登場する特定の個人が〈バイ・プレーヤー〉の位置を占める庄野さんと浅井さんが一つのグループをなし、語りの内側に特定の〈バイ・プレーヤー〉が登場しない長谷川さんと市原さんがもう一つのグループをなす。

さらに、他者との視点の〈互換〉なる概念が提起される。〈互換〉について詳しくは、後述する（V-2（2））。また、その身体論的基盤について詳しくは、大澤（1990、特に、p.1-50）、楽学舎（2000、特に、p.76-80）を参照されたい。重要な点は、庄野さん、浅井さんが、——それぞれ様式は異なるが——本人の視点と〈バイ・プレーヤー〉（特定の他者）の視点とを並立させ、かつ、両者を独特の様式で〈互換〉させることによって語りを成立させている点である。もっとも、その後、この視点の〈互換〉は、本人と〈バイ・プレーヤー〉間のみならず聞き手も巻き込んで拡大される。これとは対照的に、長谷川さん、市原さんの語りでは、〈バイ・プレーヤー〉の位置を特定の個人が占めることはなく、このために、視点の〈互換〉も、庄野さん、浅井さんとは異なった形式で生じることになる。

さて、庄野さんの〈バイ・プレーヤー〉は、具体的には、その長女であり、庄野さんの語りには、語り手本人と〈バイ・プレーヤー〉の視点の〈互換〉が明示的にあらわれる。浅井さんの〈バイ・プレーヤー〉は、

表1 4人の話りの内容要約

■庄野さん

- (1) [0:00] (導入・挨拶)
では、まず、私が地震の時、どんな状況であったかをお話したいと思います。
- (2) [0:50] (神戸に地震はない)
神戸はもう地震はないものという感覚でいたんですね。ところが、あに凶らんやです。
- (3) [2:02] (最初の一瞬)
あん、なんていうのかな、最初にちょっと揺れたんですね…(略)…気がついたら、そしたら、あの…どう言うんですか。体がぜんぜん動かない。
- (4) [2:59] (瓦礫に埋まって)
右足がね、冷たくなってきて、硬くなってるのがわかるんですね。で、ああ、これは、おかしいなと思ったけど、どうにも動けない。1センチも動けない。
- (5) [5:35] (娘の声)
ほっと、耳をすましてみると、娘が、「お母さん、お母さん」って、きく、あの小さい声で聞こえるんです。
- (6) [6:02] (死ぬことを考えて)
これは、死ぬにも死ねない。どうしようと思って、ほんとにそればかり一時期真剣に考えてたんですね。
- (7) [7:24] (飼い犬が身代わりに)
そしたら、あの、なんか、かすかにね、私が飼ってた犬の鳴き声がするんです。…(略)…それでまあ。あの子知らせてくれたおかげで、あの、私は、今の私があるんですけど。
- (8) [9:00] (わからなかった息子の様子)
その、息子が、その時は、まだ、亡くなったということもわからなくて。
- (9) [9:58] (レスキュー隊)
で、あの翌日、…(略)…息子は、あの、レスキュー隊が来てくれて、あの、引っ張り出してもらって。
- (10) [11:00] (遺体安置所)
その時に、1階に100人、2階に100人、亡くなった人が、ずうっと並べてあったんです。
- (11) [12:09] 火葬
そんな状態の中で、あの、やっと、2週間目に、あの、火葬にまわしていただけた。
- (12) [12:52] (最初の病院へ)
病院行ったら、そしたら、あの、傷してても、消毒の薬もありません。
- (13) [14:04] (別の病院へ)
やっと、尼崎っていうところの病院まで、連れてっていただいたんですけど。
- (14) [14:49] (リハビリで回復へ)
一生懸命リハビリをして、そして、今では、こうして、まあ、なんとか、歩けるようにはなってます。まだ、右足は、痺れは残ってます。
- (15) [16:01] (枕元の衣服)
でも、あたしが、今、あの、思うのに、…(略)…枕元には、さっと揺った時に、パッと着れる一通りのものは、あの、きっちり重ねて。
- (16) [17:37] (机の下にもぐり込む)
這いながらも行って、頭を突っ込んでたら、もう、後の祭りですけど、助かったじゃないかなあと思うから…(略)…命さえあったら、どうにでもなるんです。
- (17) [19:54] (語り部の動機)
一つしかない命をね、無残にね、その、なくすようなことは、あってはならないと思って、その亡くなった人の、たくさんの人の供養のためにと思って、私は語り部をしようという気持ちになったんです。
- (18) [21:08] (いじめ)
というのは、あの、皆さんが、周囲で、誰かが、その、2、3人が1人の人をいじめる、いじめてるとしましてよ。
- (19) [23:09] (再び、最初の病院で)
お母さんなんかね、声も出ないのに、と思ってたんですって。そしたら、1時間のちに、そのおばあちゃんが、もう息を引き取った。
- (20) [24:32] (意識朦朧のなかで)
自分は寝たままなんですけど、そういう意識になってしまうんです。で、やあ、ちょっと気持ち悪いなあと思いがら。あの…
- (21) [25:48] (息子のことを娘に尋ねる)
私は、娘と、その時に、いろんな話をした、ぜんぜん覚えがないんですけど、うわごとみたいに…(略)…娘から聞かされてますけど…。

[庄野さんの続き]

- (22) [27:12] (息子の死を知らされる)
「お母さん、聡、ダメだったのよお」って。一言、それは、あの、聞かされたのは、あの、いまだに、その言葉も、雰囲気も頭に残ってますけど。…(略)…気持ちのもって行き場がなくて、もう、布団をバツと頭から被って、しばらく泣いてましたね。
- (23) [29:20] (お父さん、お母さんの愛情)
あの…、我が子を亡くした悲しみっていうのは、みなさんが、大人になって、特に女の子は、あの、お母さんになって、子ども生んで、子どもを育てる段階になって初めて…。
- (24) [31:27] (ボランティア)
小さなボランティアになるわけですね。声をかけることが。
- (25) [32:47] (息子は卓球部を選んだ)
で、あの……、私が、あの、ほんとにね、こうして、あの、中学生の方なんかとお話できるのがうれしいのはね、あの、娘や息子が、中学時代のことを…。
- (26) [34:10] (先輩・後輩・言葉遣い)
「目上の人に対する言葉遣いができるからね、いい子だね」って言うていただいた…(略)…それが、あの、後になって、自分たちのすごくプラスになると、思います。
- (27) [36:19] (マンションでの備え)
で、こないだも、ある人が、…(略)…マンションは、その、あの、大変だったんですよって、言うておられました。
- (28) [37:28] (履き物)
それと、あの、履き物。…(略)…語り部のおばあちゃんがこんな話しとったということ、頭の中に入れてもらったら、なんかの時に、役にたつと思いますので。
- (29) [38:02] (深江駅のサラリーマンの話)
あの、私の家(いえ)の近くにね、あの、うーん、深江駅って…(略)…これは、エライことやって、あの、家へ飛んで帰ったという話なんかをね、聞いてます。
- (30) [39:18] (稲光の話)
だから、あの、あの地震だけは、ほんとに、あの、なんか、ちょうど、稲光が何千も集まったみたいな光が、…(略)…最近になってね、よくね、「地震の時はこうだった」、「ああだった」っていうて、出てくるんです。
- (31) [40:13] (息子と対面しなかったから)
ほいで、もう、亡くなった方は、いまだに、その、私なんか、息子の顔を見てません。…(略)…子どもを亡くして、その子どもの姿や顔を見てる人は、おそらく、何年たっても、心開いて、ああだこうだと、話をあまりできないと思うんです。
- (32) [41:02] (命を大切にしたい)
だから、もう、ただ、私が申し上げたいのは…(略)…だから、自分の命をほんとに大切にしたいと思えます。
- (33) [41:52] (終わりの挨拶)
では、一応、この辺で、私の話は、おわ、終わらせていただきます。ありがとうございました。

■浅井さん

- (1) [0:00] (挨拶・導入)
その時点の家族はですね、夫、私、大学生、高校生の男の子が2人と、亡くした小5の娘でした。
- (2) [0:33] (古い家で娘を死なせてしまった)
でも、その家(うち)で私は、むす…、娘を、殺されたというか、自分で、まあ…、死なしてしまったと、今、すごく後悔しています…。
- (3) [1:38] (地震直前)
横に寝ている娘を起こしまして、抱きかかえて、「地震だから起きなさい」と、言ったところまでは覚えてるんですけど、それ以後は、もう、全然、もう、記憶というか、もう、気を失ってわかりません。
- (4) [2:37] (瓦礫の下で)
娘の手がありまして、「大丈夫？」って言うて、「痛い！痛い！」って言うんです。…(略)…私は、「寝たらダメ、ダメ」って、必死に励ましました、娘のことを。

[浅井さんの続き]

- (5) [4:51] (「あー、助かった！」)
第一声がそうだったので、「あー、助かった！ ご飯は食べたいし、喉も乾いてるし、はっきり意識がある」と思ったので、すごく、私はホッとしました。
- (6) [6:29] (病院へ)
いたる所にケガ人、死人、そういう人がたくさん寝てます。
- (7) [8:02] (別の病院へ)
その中で、娘が、「背中が痛い、背中が痛い」と訴えます。…(略)…私の妹の主人が、家が古いということを知ってますので、見に来ました。この病院にいたら、絶対、亜希子は死んでしまう。
- (8) [9:48] (クラッシュ・シンドロームという診断)
その時についた病名が、クラッシュ・シンドロームという診断と、呼ばれました。…(略)…口からは酸素吸入、点滴…いろいろな管(かん)をつけられながら、娘は頑張りました…。
- (9) [11:08] (娘を亡くす)
なかなか、そういう状態になりますと、会えた時も、ありましたけど、だんだんと病原菌が入るということで、会える機会も少なくなります。だから、窓の外から様子を見るだけ。でも、どんだけ頑張っても、やはり……ダメで、した。
- (10) [12:21] (皆に可愛がられた娘)
娘は、私の親族の中では初めての女の子でしたので、父親に可愛がられ、…(略)…身体も大きいので、5年生でしたけれども、6せん…、6年の男の子にも負けないぐらい、おてんばでした。
- (11) [13:28] (「お母さん、泣いたらあかん」)
人として、最後に人間として喋れた言葉で、手術に入る前に、「お母さん、泣いたらあかん。私、大丈夫やから」って、はっきり言いました。
- (12) [15:28] (命を大事に！)
命は、誰からももらうことができません。命は自分のものです。だから、そして、2度と私のように子どもに先立たれて、悲しい思いをする親をつくらないでください。そして、血を、肉を、分けて生んでくれたお母さんを嘆かせないようにしてください。
- (13) [15:58] (終わりの挨拶)
どうも、今日はありがとうございました。

■長谷川さん

- (1) [0:00] (挨拶・導入)
ちょっと、ちょっとごめんな。今から準備するから。それまで待ってなあ。ごめんにゃー。
- (2) [0:32] (避難所時代の帽子とセーター)
…ほな、今から、お話しをさせていただきます。…この帽子を被らんことには、今日の話が進まへんの。
- (3) [1:51] (避難所時代の千羽鶴)
大切な、あの、千羽鶴。だから、これも大切に残しておきたいな。
- (4) [3:16] (ニューヨークからの寄せ書き)
それからな、もう1つ。…(略)…ニューヨークから、こういう寄せ書きが来てるわけ。
- (5) [4:28] (1人ぼっちになったら…)
ほな、自分たち、お父ちゃん、お母ちゃんがなくなったらどう思う？
- (6) [5:05] (言葉で勇気づけられる)
被害を受けて、心も、こない、小さく小さくなってる折に、こういうものがほんとうに勇気づけられるいうことなんです。
- (7) [5:42] (桜台小学校からの寄せ書き)
今から登場するのが、これが、7年前、小学…、あの、ここの小学校2年生、後藤先生のクラスの、あの、子たち、あの、これ、寄せ書きを…。
- (8) [6:50] (心の贈り物)
せやけに、われわれとしては、この一、ひ、あの一、寄せ書きというのんは、どんな救援物資、…(略)…も一のすごい、すばらしい贈り物。われわれにしたら、心の贈り物。

[長谷川さんの続き]

- (9) [7:56] (「おおきによ、と言うといて」)
で、その時に、…(略)…お兄ちゃん、お姉ちゃんたち、こないに書いてくれたわけよ。…(略)…ジジイが、あの、「おおきによ」と言うといてな。頼むでー。そやけに、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちには、これはもう、直接言えないから。よろしゅうお願いしまーす。
- (10) [9:38] (地震直前)
7年前の今日、5時46分…(略)…起きて、自分の布団に、さあ、横になろう、横になって、少ししたら、ドーンと、思いっきり揺れたわけ。
- (11) [10:55] (その瞬間)
こんな立っておられへん。座ってな、あぐらかいて座ったまま、身体をどないして、両手で支えていいんや。そんな状況。
- (12) [13:04] (外へ出ようとする)
何せ、外へ出よう。…(略)…その階段が30センチほど、ガターンと外れて、落ちてるわけ。…(略)…こういう感じで歩いて。
- (13) [14:42] (揺れ戻しが怖かった)
ほんで、そなしよ、あの、近所の人たちが、「わー、大きな地震や、次に揺れ戻しがあるから、恐いから、安全なところに行こ」言うて。
- (14) [15:37] (タバコ吸いたかったけど)
ガスの臭いするから、絶対にみんなここではタバコ吸うな言うて…(略)…ずーっと町内会を歩きまわってたら、家が、2階建ての家が、ベッシャンコになってしまった。
- (15) [16:55] (大工道具)
みんな大工道具、家を壊すような道具というのが1つもないわけよ。ほとんど、い、もう家では持っていないわけ。自分たちの家でのこぎりやかなづちのある家、あるかな？ あるー？
- (16) [17:35] (救出す)
手で1つ1つのけながら、それで、あの、「どこや、どこや」言うて、…(略)…一人出られるぐらいの穴があればな、そこから、元気なお兄ちゃんは、何とか自分で這い出してくれたんや。
- (17) [18:59] (近所のおばあちゃん)
そいで、その隣の部屋に、おばあちゃんが…(略)…助け出した折には、もう遅かったの。おばあちゃんにしてもな、そないして、みんな、夢があったの。
- (18) [20:05] (命を守る)
でも、ほんとに、あー、われわれは、命を1人で絶対に守れない。…(略)…みんな楽しく、元気に、あの、頑張っていてほしい。
- (19) [20:55] (ボランティアのお兄ちゃん、お姉ちゃん)
で、あの一、あ、も、もうちょっと簡単に言わせて…(略)…ボランティアのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちいうたら、もーのすごいすばらしい人。
- (20) [22:35] (避難所の学校に迷惑かけた)
何とかおらして、頑張らしてという感じでおらしてもうて。あの一、その、地震の年の、8月20日に避難所が、神戸、あの、被災地の避難所はみんな解消されていった。
- (21) [24:08] (終わりの挨拶)
簡単になってしまったけどな。でも、この一、こ、簡単に、してしまった、あとは、市原のおばちゃんから、じっくりお話し聞いてな。いやー、おおきに。

■市原さん

- (1) [0:00] (導入・予想もしなかった地震)
7年前の今日、1月17日、あんな大きな地震があるなんて、神戸に住んでる私たち誰1人考えてもいませんでした。
- (2) [0:57] (神戸が大好き)
私も、神戸が大好きで…(略)…ずーと神戸に住んでるんですけども。高槻に2年間住んだことがあります。

[市原さんの続き]

- (3) [1:33] (その瞬間)
で、7年前の、あの朝、さっきの話にもありましたけれども、ドーンというすごい音とともに、…(略)…
とにかくもう死んでしまうんだ。そう思いました。
- (4) [2:28] (2階が1階に)
2, 3歩で地面に着いたんです。何と、2階が1階になってたんですね。でも、空、外は、まだ、まだ外は真っ暗でした。
- (5) [3:49] (火災…変わり果てた街と)
で、まわりを見まわすと、西の方にも、北の方にも、東の方にも、もう、すごい勢いで家が燃えてるんです。
- (6) [5:07] (電柱にやられた自宅)
ふっと、自分の家を見たんです。そうすると、家の前の電柱が、このへんくらい…から折れ曲がって、折れて、屋根の上に乗っかっているんです。
- (7) [5:44] (家の中へ)
斜めになった家の中にいると、気持ちが悪くなるんです。初めて知りました。乗り物に酔ったような、あんな感じで、気持ちが悪くなって、外に出て、また外に出て行きました。
- (8) [6:45] (ヘリコプター)
そして声の方に、こう行って、助け出すんですけども、そのうち、空にヘリコプター…(略)…建物の下になっている人の声が全く聞こえなくなってしまうんです。
- (9) [7:51] (亡くなった赤ちゃん)
うちの裏に住んでいた赤ちゃんは、5ヶ月だった…(略)…お父さんがお布団にくるんで、…(略)…クルクルクルクル、何度も何度も歩いていたのが、今でも目に浮かびます。
- (10) [8:29] (近くのマンション)
また、近くのマンションは、マンションなんてすごい頑丈ですから、大丈夫だと思いますよね。だけれども、…(略)…全員亡くなっていました。毎日のように新聞に、たくさんの方の名前が、亡くなった方の名前が出てくるんです。
- (11) [9:23] (実家へ)
で、私は、家が全部つぶれてしまって、その日の夜に、神戸の、須磨の、少し向こうですけども、垂水という所に…(略)…着くと、テレビもついてるんです。電気が明々ついている。…(略)…嘘のような、どうして、って、はじめて、ワンワンワン泣けて、悲しかったのかどうかよくわからないんですけども。もう、涙が止まらなくなった、そんな状態でした。
- (12) [10:38] (知り合いの男の子)
エーッ、あの人もこの人も、っていうぐらいに、名前が載っていくんです。その中で、ある男の子の名前を見つけたんです。
- (13) [11:56] (野球選手になる夢)
その男の子は、中学1年生だったんです。でも、男の子は小学校の時から少年野球を、その少年野球のチームに入って、頑張っていました。…(略)…たくさんの方々が死にたくないのに、死ななければならなかったということ、皆さんにも知っていただきたい。
- (14) [13:30] (レインボーハウス)
そして、私の家の近くにレインボーハウス、…(略)…お父さんやお母さんを亡くした子どもたち、その子どもたちを、なんとか1日でも早く元気に…。
- (15) [14:30] (元気を取り戻してきた神戸)
いろんな方たちがボランティアでかけつけてくれました。そして、神戸のみんなに元気を出してって励ましてくれました。
- (16) [15:34] (心が病気になる)
でも、地震の時って、みんな心が、すごく病気になるって…。…(略)…自分が自分が、っていう気持ちが起こってくるんです。大人たちが結構モメゴトをしていました。
- (17) [16:25] (子どもたちが頑張った)
ある時、子どもたちは自分たちから率先して、食べ物をみんなに…(略)…このように神戸のみんなが頑張って…。ねえ、すごい心を取り戻しました。

[市原さんの続き]

- (18) [17:30] (何かできることがある)
 私たちができること、必ずあります。…(略)…私は語り部をしてるんです。そして、今、生きてる私たちは、命をとっても大事にしていていただきたい。あの地震の日に、死にたくないのに、死ななくてはならなかった人たちがたくさんいて、夢も希望も全部なくなってしまった…。
- (19) [18:44] (神戸に戻ってきた)
 私は神戸が好きで、また神戸に戻ってきました。…(略)…ほんとに帰りたいのに帰れない、その人たちが日本中のいろんなところに、まだ、頑張ってる、います。
- (20) [19:37] (優しい人に・終わりの挨拶)
 どうぞ、みなさんも自分たちのできることで、何か人のために役立つことがある、っていうことを、いつも心に留めて、そういうふうな優しい心を持った、大人になっていただきたい。…(略)…ありがとうございました。

亡くなった長女である。ただし、浅井さんの場合、語りにおける明示的な視点は、徹底して語り手本人にあり、当の長女は、受動的に語られる位置にある。ところが、語りの終結部で、両者の立場は劇的に反転し、実は、浅井さんの語り全体が、ある意味でこの長女自身の発話であったと見なせること、すなわち、それが亡くなった者がする物語であったと見なせることが判明する。言いかえれば、浅井さんの場合、視点の〈互換〉は一見あらわれないが、実は、庄野さん以上に徹底した形式でそれが生じている——Bakhtin 流に言えば、「他者(長女;引用者)のことばの引用者(浅井さん;引用者)の文脈が逆に他者のことばによって解体される」(茂呂, 1991, p.196)のである。このとき、浅井さんは、言わば、亡くなった長女そのものである。

さらに、庄野さん、浅井さんに見られる視点の〈互換〉は、単に語りの内部に閉塞するのではなく、「仮定法の語り」(Bruner, 1999; やまだ, 2000b)によって、語りの外部にも展開され聞き手をも巻き込む視点の〈互換〉が生じる。庄野さんとその長女との視点の〈互換〉、あるいは、浅井さんと長女との視点の〈互換〉は、聞き手である児童・生徒と他者(例えば、その両親)との間の視点の〈互換〉を誘発するのである。2人の語りが有する、日常用語に言う迫力、あるいは、他者を動かす力は、分析的には、この聞き手へと展開された〈互換〉関係に起因することが示される。

他方、先述の通り、長谷川さん、市原さんの場合、語りの内部に特定の〈バイ・プレーヤー〉は登場せず、

それぞれ、聞き手(長谷川さん)、「神戸の街」という集合体全体(市原さん)が、〈バイ・プレーヤー〉の位置を占める。もっとも、長谷川さんの語りには、「後藤先生」、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」という重要人物が登場する。さらに、長谷川さんの語りは、聞き手である児童、および、語りの場に臨席した後藤先生を前に、自らを「爺(ジジイ)」と位置づけることによって、眼前の聞き手とインタラクティブに語りを進める点で、他の3人とは異なる特徴を有している。このことは、長谷川さんの語りが、後藤先生を基点に、先生とともに長谷川さんに寄せ書きを送った当時の桜台小学校の児童ら(「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と、眼前の聞き手としての児童らとが重ね合わされて構成されていることを示唆している。言いかえれば、長谷川さんの語りは、当時の児童と聞き手としての児童との間で視点の〈互換〉を生起させる構成となっている。この意味で、長谷川さんの語りの〈バイ・プレーヤー〉は、それを、体験語りを駆動させるエージェントとして見る限り、後藤先生、もしくは、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」であるとも考えることも可能である。しかし、語りという営為を全体として基礎づけている〈バイ・プレーヤー〉は、先述の通り、むしろ、聞き手であると言うことができる。

最後に、市原さんの語りは、「神戸の街」に対する独特のこだわりによって特徴づけられる。市原さんは、大好きな「神戸の街」と、そこに住む、あるいは住んでいた人々(「その男の子」、「その赤ちゃん」など)について、「神戸」という用語を何度も使用しながら

語る。さらに、市原さんは、自分が住む大切な街に関する物語を、聞き手である児童にも共有してもらおうと図る。このとき、語りの冒頭で、市原さん自身がかつて高槻（聞き手が暮らす土地）に住んでいたことが明言され、そのことが、市原さんが神戸の街を見る視点と、児童らが高槻の街を見る視点との〈互換〉を喚起する伏線となっている。これらの点を踏まえて、市原さんの語りの〈パイ・プレーヤー〉は、(特定の)人物であるというよりも、むしろ、「神戸の街」という集合体全体であることが示される。

2. 庄野さんの語り

(1) 「娘から聞かされてますけど・・・」

庄野さんの語りを聞いてただちに気づくことは、庄野さんがその長女を指示する言葉「娘」が、非常に多数回登場することである。「娘」は、合計 28 回登場する。この回数は、浅井さんの語りに登場する「娘」(27 回)を上まわって、語り手以外の特定の人物を指示する言葉としては、4 つの語りの中でもっとも多い(なお、同じ庄野さんが亡くなった長男に言及する用語「息子」「長男」「聡」の登場回数は、20 回である)。

しかも、注目すべきは、「娘」の登場回数と語りの様式との関係である。表 1 から明らかなように、庄野さんの語りは、途中で大きく、そのスタイルを変える。すなわち、前半部分(セクション 1~26 (以下、セクションは S と略記))では、ほぼ一貫して、自らの直接体験、もしくは、「娘」の直接体験を語るスタイルが継続する。しかし、S27 以降、それ以前の様式が一変し、他者から伝え聞いたエピソードが断片的に紹介されるスタイルに変わる——「言いたいことがいっぱいあり過ぎて、まとまらなくなってしまう」は、語りを終えた直後の庄野さんの口癖でもある。そして、計 28 回の「娘」は、すべて、この前半部分(約 34 分まで)に登場する。別言すれば、前半部分では、庄野さんは、約 70 秒に 1 回、「娘」という言葉を口にしてのに対し、後半部分では約 8 分間、一度も「娘」を使用していないことになる。以上のことは、庄野さんにおける基本的な語りの様式は、語りの前半部分(S1~26)にあらわれており、それは、相当程度、「娘」

によって特徴づけられることを意味している。なお、こうした語りの様式の変異が直接体験を語るるときと伝聞情報を語るるときとの間で生じうることは、大橋ら(2002)が供述分析を通して見いだした知見と合致しており、その点でも興味深い。

もっとも、より重要なことは、「娘」が登場する際の形式である。「娘」は、単なる登場人物としてあらわれるのではない。庄野さんの語りの様式を本質的に規定する存在(〈パイ・プレーヤー〉)としてあらわれる。それは、次のような意味においてである。第 1 に、「娘」という〈パイ・プレーヤー〉は、庄野さんの直接体験・行為を、特殊な事情——瓦礫の下で意識を失っていた、病院で意識朦朧としていた——から語りえない庄野さんに代わって語る者としてあらわれる。例えば、S21 は、ほぼ全編が、この形態の発話になっている。

私は、娘と、その時に、いろんな話をした、ぜんぜん覚えがないんですけど、うわごとみたいに、奇妙なことを言うてたらしいんです。それは、後で聞かされたんですけど。あの、やっぱり、頭のどこかで、息子のことが気になってたかして、あの、娘に、あの、お母さん、ああ、あの、娘に、「聡、どうしてるの?」って言うたら、娘が、「うん、寝てるよ」って言うたらしいんです。そしたら、私がまたね、あの、「何言ってるの、のんきなこと言うたらんと、早く行って起こしてきてよ」と私がね、その、すごく、今まで何にも言わなかったのに、急にね、怖い顔してね、「早く起こしてきてよ」って言うたもんで、娘がね、「お母さん、ごめんねって、もう車ねえ、お父ちゃん帰ってしまっないから、この暗い中、あの、真っ暗闇の中ね、歩いて家まで帰れないのよ。明日まで待つてね」って言うて、もうその時、死んでんのはわかってましたけど。その話を、私に出来なかったもんですから、もう、それで、なんか、あの、その後の、やっぱり普段心に思ってることを、いろんなことを、5つ6つ、矢継ぎ早に言っただけというのは、娘から聞かされてますけど…。(S21)

第 2 に、「娘」という〈パイ・プレーヤー〉は、庄野さんにとって他者である長女(「娘」)の体験・行為を聞き手に伝達する役割を果たす。この種の発話に

は、それが、庄野さん自身の体験・行為ではないことが明示される場合（例えば、「娘が言っていましたけど」（下記 S10）のような発話）と、そのことが明示されず、あたかも、庄野さん自身が長女であるかのように発話される場合（例えば、下記 S13）の 2 通りがある。

無念な気持ちで、あの、赤ちゃんから年寄りまでいますからね。だから、特に若い人なんか、残念だった。その想いが、充滿してるわけなんですよね。で、あの、「到底おれなかったのよ」って、「おってやりたかったけど」って、それは、何回も、娘が言っていましたけど。(S10)

……病院側が、ここは透析の部屋ですから、空けてください、15 分以内に空けてくださいって、言われたのには、娘がびっくりしてしまって、この状況で、電話かけるのにも、1 時間、それに、15 分で、どうして動けるんですかって、せめて半日間待って下さいって頼んで、そして、方々、あの、電話をして、やっと、あの、尼崎ってところの病院まで、連れて行っていただいたんですけど。(S13)

(2) 庄野さんと「娘」との〈互換〉

問題は、上記のような語りの「様式」——庄野さん自身の視点と〈バイ・プレーヤー〉たる「娘」の視点が輻輳する様式——がとられる根拠・理由、そして、それがもたらす効果・影響である。ここでは、まず、前者について考察したい。語りの中で、庄野さんと長女との間で生じる視点の〈互換〉は、直接的には、庄野さんと長女とが、震災後かわした無数の会話に由来すると言える。庄野さんは、瓦礫に埋まって気を失い意識朦朧としていた間に、自らや長女、そして、亡くなった長男に生じたことを、長女から何度も聞かされていた。そして、自分の母親が瓦礫の下に埋まっている様子を目の当たりにした長女の立場（視点）に、何度もわが身を置いたことだろう。あるいは、長男の死を薄々察しているらしい母親に、そのことを切り出すときの娘の思いに何度も思いを馳せたであろう——この推定が事実であることを、筆者は、庄野さんとの 3 年にわたる接触を通して確認している。庄野さんの場合、こうした体験が、語りの様式の基調を形づくっていると考えられる。言いかえれば、庄野さんの語りは、

庄野さんによる庄野さんについての「自己物語」なのではなく、庄野さんと「娘」との「対話」（Bakhtin, 1988）なのである。

もっとも、ここで注意すべきことは、こうした濃密な〈互換〉の作業自体が必要とされた理由である。それは、さしあたって、庄野さんが瓦礫に埋まり気を失っていたために、庄野さん自身に対して、その間の出来事が欠落したからだと答えることができる。しかし、この回答は、以下に述べる一般論における特殊事例として理解しておく必要がある。すなわち、一般に、すべての体験は、ある身体に対して生じる。特定の時間に、特定の空間を占めることのできる身体は唯一無二であるから、すべての体験は、その身体に固有のものである。例えば、喫茶店のテーブルを挟んで談笑する 2 人の人間の体験は、厳密には異なるもの（例えば、うち一人から見えている外の風景は、もう一人からは見えない）である。つまり、この 2 人——もちろん、いずれか一方が気を失っているわけではないが——の体験は、厳密には、それぞれに固有（交換不可能）のものである。しかし、通常は、会話をはじめとする現実的な相互作用における視点の〈互換〉によって、例えば、あのとき喫茶店で喋った、といった形で、2 人にとっての〈共通の経験〉（楽学舎、2000；特に、p.80-83）が存在したと理解（実際は、誤解）され、体験（経験）の唯一無二性は隠蔽される。

ところが、地震をはじめとする自然災害は、通常は隠蔽されている体験の唯一無二性を人々に否応なく突きつける性質をもっている。それは、戦場体験を分析した富山（1995）が指摘するように、災害や戦争の現場においては、特定の時間、場所に特定の身体があったこと——浜田（2002）の言う「身体の臨場性」——の意味が極大化するからである。庄野さんが瓦礫の下に埋まっていたとき、庄野さんと「娘」は、ほんの 10 数センチの空間的相違——テーブルを挟んでいたあの 2 人と何ら変わらない——をどんなにか遠く感じたことであろう。また、隣室で寝ていた息子の死を知った庄野さんにとって、ほんの数メートルの空間的相違が、長男との現実的な〈共通の経験〉を永遠に封殺する距離として感受されたであろう。あるいは、庄野さんは、「あと、数分早く起きていれば……」という言葉、いったい何度筆者に語ってくれたことだろう

う。庄野さんと「娘」が、〈共通の経験〉を取り戻すのに、何年間にもわたる会話、つまり、視点の〈互換〉を必要としたのは、そして、今も庄野さんの語りが〈バイ・プレーヤー〉たる「娘」との〈互換〉を基調としているのは、このためだと考察される。

(3) 仮定法の語り

—聞き手へと拡大する〈互換〉

庄野さんの語りは、非常に大きなインパクトを聞き手に与えるものである。すなわち、その語りは、語りの内部に登場する「娘」という非常に強力な〈バイ・プレーヤー〉に支えられているが、決して、語りの内部に閉塞することなく外部へも開かれているように見える。何が、それを担保しているのだろうか。その鍵を握るのが、「お父さん（お父ちゃんを含む）」（9回登場）、「お母さん（母親を含む）」（21回登場）、「お父さん、お母さん（両親、または、親を含む）」（8回登場）というキーワードであると思われる。これらの用語は、「娘」から見た庄野さんを指示する場合と、聞き手である生徒から見た親を指示する場合に大別される。前者の例は、先に全編引用したS21に多数見られる。また、後者の例としては、以下のような発話がある。

あの〔涙声に〕…、我が子を亡くした悲しみっていうのは、みなさんが、大人になって、特に女の子は、あの、お母さんになって、子ども生んで、子どもを育てる段階になって初めて、その、自分が親にこういう形で、こういう愛情をかけて育てていただいたっていう気持ちがね、〔ほぼ通常の声に戻って〕絶対わかる時が来るんです。母親っていうのは……（S23）

だから、もう、ただ、私が申し上げたいのは、あの…、まあ、せつかく、お父さんやお母さん、みなで、あの、育てていただいた大事な命ですから、あの、できるだけ、あの、お父さんやお母さんに迷惑かけないように……（S32）

ここで試みられていることは、「娘」と庄野さんとの間の〈互換〉、あるいは、「息子」と庄野さんとの間の〈互換〉を、聞き手である生徒自身とその両親との

間の〈互換〉、あるいは、親になった生徒自身と、その将来の子どもたちとの間の〈互換〉へと重ね合わせることであろう。〈互換〉を聞き手の生活世界へと展開させることを（無意識に）意図した発話は、他にもある。

そしたら、やっぱり、あの、皆さんも、わかっていると思います。今ちょうど中間ですね、先輩がいて、後輩がいて。だから、あの、先輩と後輩との間に挟まれてます。私もね、息子からいろいろ聞いてわかるんですけど、…（略）…「後輩いじめたるぞ」という気持ちじゃなくって、自分が置かれた立場をもう一辺反省してみて、後輩をかわいがってやる。そしたら、「あ、あの先輩は」というて尊敬される先輩になる。（笑い声で）うふっ、と思いませんか？ ふふ。これはね、私が勝手にね、思ってるんですけど。（S26）

よく、あの、子どもが、あの、キレたからやったんやとか、その、おじいさん、おばあさんを殺したり、親を殺したり、そして、お友達をいじめて、あの、どう言うんですか、あの、死に追いやったりとか、いろんな、あの、事件が、一時期ものすご、ありました。その時に、私は、自分で、ああ、あないして、あの無念な思いで、あの、たくさんの方が亡くなってる。だから、あの、せつかく、あの、持ってる大事な命、一つしかない命をね、無残にね、その、なくすようなことは、あってはならないと思って、その亡くなった人の、たくさんの方の供養のためにと思って、私は語り部をしようという気持ちになったんです。（S17）

前者は、一方向的な語りを続けてきた庄野さんが、語りの中でただ一度、語調を変化させ、聞き手に対してあからさまに反応を求めている（ことが聞き手にはっきりとわかる）箇所でもある。ここでも、庄野さんは、亡くなった「息子」と聞き手である生徒とを重ね合わせ、「息子」に対する庄野さん（親）の思いを、生徒に対する親の思いへと展開させることを（無意識に）意図していると言える。また、後者でも、いじめによる死と震災による死とが対応づけられている。先に触れたように、聞き手の生徒らが、語りの約1年前、校内の事故で友人を亡くしていることも、この種の〈互換〉を促進したにちがいない。

別の見方をすれば、庄野さんの語りは、聞き手である生徒に対して、「もし、あなた方が、親になったら」、「いじめで他人を傷つけたら」と、仮定法による語りかけ (Bruner, 1999) をなしていることになる。この仮定法は、むしろ、一方では、聞き手である生徒らに語りの内容を効果的に伝達するための手段として用いられているわけである。が、他方では、やまだ (2000b) が指摘するように、語り手本人に対しても、時間軸の過去から未来への転換を通して、すなわち、「(自分が) あのと、こうしていれば……」から、「(自分、あるいは、他者たちが) 今後、こうすれば……」という転換を通して、過去の辛い体験をポジティブな方向に転化させるための手段として機能していると言える。こうして、庄野さんの語りを支える〈パイ・プレーヤー〉との〈互換〉は、単に語りの内部に閉塞することなく聞き手へと拡大され、それが、庄野さんの語りに、聞き手に対する訴求力を生んでいたのである。

3. 浅井さんの語り

(1) 淡々と語られる「私」が見た世界

浅井さんの語りも、特定の〈パイ・プレーヤー〉、すなわち、地震で亡くなった長女(「娘」)を伴った語りである。先述の通り、「娘」は、計27回登場する。ただし、浅井さんにとっての「娘」と、上で見た庄野さんにとっての「娘」とは、その様相を異にしている。浅井さんの語りは、一貫して、浅井さん自身の視点に立って浅井さんから見た世界を描き出す。浅井さんが、自身を指示する目的で用いた「私(わたくし、わたし)」は、約15分の語りの中に31回も登場する。「娘」は、その中に、「私」から見た世界の中に姿を現す。むしろ、「娘」が能作主体の位置を占める場合もあるが、その際は、そのことが明示される。例えば、

時間はわからないけど、娘は痛がる、私も痛い、苦しい。でも、だーれも何にもしてくれないので…、お互いに私が気を失う時には娘が「お母さん」と呼び、娘が返事をしない時には、真っ暗な中で「亜希子、亜希子」って呼びかけました。(S4)

などである。

浅井さんの語りがあるもう一つの特徴は、その非常に整然とした時間配列である。この特徴は、庄野さんと比較すると明らかである。浅井さんの場合、挨拶・導入 (S1) の後、震災直前 (S2)、地震直前 (S3)、揺れの直後 (S4)、救出直後 (S5)、最初の病院 (S6)、2つ目の病院 (S7)、診察結果 (S8)、「娘」の死 (S9) まで、事実経過のみが、すべて時間順序に従って話される。他方、庄野さんの場合、救出直後 (S7) までは発生時間順であるが、「息子」の死 (S8)～火葬 (S11) で、一度、話が先に飛び、再び、最初の病院 (S12) へと戻る。さらに、S15～18 で事実経過とは異なる内容(無時間的な一般論)が挟まり、再度、最初の病院 (S19) に回帰する。

もっとも、ここで指摘したいことは、いずれの語りも聞きやすいかといったことではない。浅井さん自身や「娘」の心的状態の描写を極力抑制し、事実経過のみを、しかも、非常に整然とした順序で語っていく浅井さんの語りは、ある意味で、非常に落ち着いた淡々としたものに聞こえるということである。もう少し理論的な表現をするならば、浅井さんにとって、語る自己(「私」)は非常に安定的に成立しており、その安定した視点に立脚して語り展開されるように聞こえるということである。この点は、「娘」との頻繁な〈互換〉によって特徴づけられていた庄野さんと好対照である。

(2) 私が見た「娘」＝「娘」が見た私

では、いかなる意味で、浅井さんの語りにおいて、「娘」が単なる重要人物を越えた〈パイ・プレーヤー〉だと言えるのか。ポイントとなるのは、前項で見たS9までの語りの様式が、「娘」に関する背景情報を述べるS10を挟んで、S11に至って大きく転換する点である。S11の全文を下記に記す。

でも、その甘えん坊であって、私にとっては、私がいなければ何もできないと思っていた娘に、命の最後の戦いで、人間はどんなに頑張れるものか、命を生きることがどんなに大切なことか、ということ、私に、目の前で教えていきました。そして、人として、最後に人間として喋れた言葉で、手術に入る前に、「お母さん、泣いたらあか

ん。私、大丈夫やから」[非常に大きな声で]って、はっきり[非常に大きな声で]言いました。その言葉は、私が2人で病院で会えなくても、た、命の戦いをしている間、窓越しで会えずに、娘の管(かん)だらけの、管(くだ)だらけの姿を見ている間も、私の心の支えでした。その言葉を頼りに、今まで、私は、ずっと自分を支えてきました。毎日、泣きたい、辛い時には、あれだけ苦しい思いをさした娘のために、自分が泣くのは卑怯だと思いました。同じ瓦礫に埋まり、同じ症状を持ち、それでも私は生き残りました。そして、娘は、人間が生きるために努力することの大切さ、私が手助けをしなければ、人に頼らなければ生きていないと思っていたむす…、おさ…、幼い娘の…、命の大切さということを皆様にお伝えしたくて、いつもこういう風にお話させていたでいます……。(S11)

トランスクリプトに示したように、浅井さんが現実に関くことのできた「娘」の最後の言葉、「お母さん、泣いたらあかん。私、大丈夫やから」は、語りの現場でも、際だって大きな声で発声された。筆者の考えでは、この「娘」の発話(の引用)は、語りの構造そのものに一大転換をもたらしている。一言で言えば、この一言は、浅井さんの語りの主体が、——この時点まで終始揺らぐことがなかったにもかかわらず——実は、浅井さん自身ではなく、むしろ、この時点まで、語りの対象となるだけの受動的な存在でしかなかった「娘」の側にあったことを示唆している。明確に強勢された上記の一言は、浅井さんを見る「娘」の眼差し、しかも、この世で最後の眼差しに、浅井さん自身が完全に同化し、この時点までの発話が、その表層的な表れとは異なって、実は、「娘」の視点から見た浅井さん自身を描き出していたことを示している。

亡くなった長男や全壊した自宅をめぐって、庄野さんが「娘」と何度も視点の〈互換〉を体験したように、あるいは、それ以上に、浅井さんは、入院中の「娘」、亡くなってしまった「娘」へと思いを馳せたであろう。数限りない回数、視点を〈互換〉させ、浅井さんは「娘」になったにちがいない——庄野さんの場合と同様、2年あまりにわたる接触を通じて、筆者はこのことが事実であることを確かめている。実際、このことは、語りそのものの中にもあらわれている。例えば、

以下のような事例である。

毎日、泣きたい、辛い時…(中略)…同じ症状を持ち、それでも私は生き残りました。(S11, 上記参照)

私にとっては、自分が生まれた家に、自分が楽であり、自分が楽しかったから住んだんであって、娘が住みたくて、そこに生まれたわけではないので、何だか、私が自分では、娘も、自分の意志、自分の勝手に殺したのではないかと、ずっと今まで思っています。(S9)

この種の濃密な〈互換〉の作業を、相互に比較することに意味があるとは思われないが、あえて、庄野さんと浅井さんとの相違点を指摘すれば、庄野さんの〈互換〉は生きた「娘」とのそれであったのに対して、浅井さんのそれは、今や、この世にはいない「娘」との〈互換〉である点である。庄野さんの場合、先述のように、震災によって一時断絶したものの、その後ともに生きてきた「娘」との現実的な対話(視点の〈互換〉)によって、〈共通の経験〉を現実的に再構築してきたと言えるだろう。他方で、「娘」を亡くした浅井さんにとって、その作業は、現実的には非常に困難である。しかし、この現実的困難は、浅井さんの〈互換〉に独特の効果を生み出した可能性がある。つまり、「娘」と現実的な視点の〈互換〉をなしえないがゆえに、逆説的に、浅井さんは、生きる者同士がなしうる〈互換〉よりも強力な〈互換〉を亡くなった「娘」との間で実現しうるのである。

このことの意味は、この世に生きる2つの身体(人間)は、究極的には、同じ体験をなしえない一方で——同じ時間に同じ空間を2つの身体が占めることはできないのだから——、亡くなった者はそうした制約を免れていることを想起すれば了解されるであろう。庄野さんは、「娘」とともに生きている以上、「娘」そのものにはなれない。よって、2人が構成する〈共通の経験〉は仮初めのものであり、2人は、究極的には異なる世界を生きていることになる。他方、浅井さんは、上記の意味で、「娘」と完全に〈共通の経験〉を構成しうるのである。要するに、浅井さんの語りは、実は、むしろ、〈バイ・プレーヤー〉たる「娘」がす

る語りなのである。正確に言えば、浅井さんの語りは、娘との数限りない〈互換〉によって「娘」と融合した浅井さん——「浅井さん＝娘」という主体——が、「浅井さん＝娘」という主体にとっての〈共通の経験〉を、浅井さんという身体から発することによって成立している。

(3) 仮定法の語り——過去から未来へ

浅井さんの語りも、非常に大きなインパクトを聞き手に与えるものである。その主因は、これまでの分析で尽きていると思われる。ただし、それに加えて、庄野さんと同様、浅井さんと「娘」との間の〈互換〉も、仮定法的な発話を通して、聞き手である生徒自身と他者（「娘」、生徒の両親、生徒の友人など）との間の〈互換〉へと展開されており、このことも、浅井さんの語り聞き手に強い影響を及ぼす要因となっていると思われる。

議論の骨格は、V-2 (3) で提示したので、ここでは、2, 3 の具体例のみを提示するととどめよう。例えば、先にも引用した S9 のくんだり、

みんな子どもはマンションがいいって申しましたけれども、私はそこが自慢でした。でも、その家（うち）で私は、むす…、娘を、殺されたというか、自分で、まあ…、死なしてしまったと、今、すごく後悔しています… (S9)

は、「マンションに引っ越していれば死なせずにすんだかもしれない」、「あの時娘が死ななければ、今ごろは目の前の子どもたちのように…」という悔恨を仮定法過去の形式で提起するものである。この思いは、「一生消えない」（浅井さん自身の言葉）のものであろう。しかし、他方で、この種の仮定法は、別の仮定法的表現へと変化する兆しも見せている。つまり、以下のような発話である。

心が健康、だだったら、身体も健康です。身体が健康だったら、心も健康になります。だから、皆さんも、心も身体も鍛えて、元気に生きてください。そして、何よりも、どんなことよりも、命を大切にしてください。(S12)

命は自分のものです。だから、そして、2度と私のように子どもに先立たれて、悲しい思いをする親をつくらないでください。(S12)

これらの表現は、「今（から）…すれば、…だろう」という仮定法未来の形式をとって、自らの過去を他者（聞き手）の未来へと転回させ、もって、自身の生活世界にも未来への志向性を導入するものと言える。

4. 長谷川さんの語り

(1) 「ジジイ」——インタラクティブな語り

一見してわかる長谷川さんの語りの特徴は、「ジジイ」を1人称代名詞として使用している点である（計13回登場）。他の活動場面で、「ジジイ」が、「オッチャン」、「オッサン」等に変化することはあっても、長谷川さんの語りに、「私（わたし）」、「俺」、「僕」といった種類の1人称代名詞が用いられることは、ほとんどない。実際、ここで対象としている語りでも、「僕（わし）」が1回登場するのみである。この点は、「私（わたし、または、わたくし）」が、それぞれ40回以上用いられた庄野さん、浅井さん、あるいは、市原さん（24回）と好対照をなしている。なお、1人称代名詞の欠落を補うように、長谷川さんの場合、「われわれ」が計8回用いられているが、この点については後述する。

重要なことは、「ジジイ」という自称が、長谷川さんの語りの様式を、——少なくとも、庄野さん、浅井さんと比較して——聞き手との間でインタラクティブ（対話的）にしている点だと思われる。実は、「ジジイ」は、分析対象とした語りの直前、2人の語り部（長谷川さん、市原さん）が自己紹介する際に、「神戸から来たジジイです」という形で長谷川さんの第一声として発せられ、多くの児童から、笑い声というリアクションを得ている。長谷川さんの語りは、こうした導入部とともに開始されることが多く、「ジジイ」、「オッチャン」といった聞き手側から見た世俗的な呼称が、語りの様式そのものをインタラクティブ（対話的）なものとして提示する機能を有している。実際、長谷川さんの場合、聞き手に対する問いかけが、語りの中に計17回も含まれる。しかも、そのすべてに対

して、聞き手から応答（言語、非言語を含め）があったことをビデオ記録から確認できる。この数字は、他の語り手たちのそれ（庄野さん：1回、浅井さん：0回、市原さん：5回）と比べても群を抜いている。具体的には、例えば、以下のようなケースである。

7年前の今日、5時46分、自分たち起きてる？
 「起きてる」（数名の児童の返事）（S10）

ほな、自分たち、お父ちゃん、お母ちゃんがなくなったらどう思う？ [悲しい（児童数名の返答）]
 （S5）

以上のことは、長谷川さんの語りを、その様式においてとらえたとき、聞き手である児童たちが、〈バイ・プレーヤー〉の役割を果たしていることを示唆しているのではないだろうか。すなわち、庄野さん、浅井さんの場合、語りの内部に、特定の〈バイ・プレーヤー〉が存在し、その〈バイ・プレーヤー〉と語り手との〈互換〉が聞き手へと展開・拡大することによって、聞き手が語りの内部へと吸入されていったと考えられる。それに対して、長谷川さんの場合、当初から、聞き手が語りという行為を構成する重要な一角（〈バイ・プレーヤー〉）を担っていると言える。もっとも、この結論を妥当なものとして主張するためには、長谷川さんの語りに含まれる他のキーワード群に注目しなければならない。項をあらためて検討しよう。

(2) 「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と「後藤先生」

—— 7年前と今をつなぐ人々

V-1で述べたように、「お兄ちゃん、お姉ちゃん（たち）」は、聞き手である児童にとっての先輩、つまり、震災後、長谷川さんが避難していた避難所に寄せ書きを送った、桜台小学校の当時の2年生児童（語りの時点で、中学3年生）を指示する用語である。また、「後藤先生」は、それを仲介した当時の担任教師（語りの現場にも参加）を指示する用語である。長谷川さんの語りには、前者は9回、後者も9回、登場する。

重要なことは、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」が、語りの現場に持ち込まれた当時のままの寄せ書きという

事物の存在、および、後藤先生という身体の存在の効果も相まって、7年前の出来事と現在とを接続する役割を果たしている点である。すなわち、長谷川さんの語りは、後藤先生を基点に、彼女とともに長谷川さんに寄せ書きを送った当時の桜台小学校の児童（「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と、眼前の聞き手としての児童らとを重ね合わせることによって構成されているのである。言いかえれば、長谷川さんの語りは、当時の児童と聞き手としての児童との間で視点の〈互換〉を誘発させる構成となっている。この点が、もっとも典型的にあらわれているのが、次に示すS9の対話的語りである。少し長くなるが、全編引用しておこう。

で、その時に、今、後藤先生がお話しされたように、その、な、あの、後藤先生が見て、あの、感じたことを、自分たち、あの、みんなにお話しして、それを、あの、自分たちのお兄ちゃん、お姉ちゃんたち、こないに書いてくれたわけよ。だから、ものすごい嬉しかったよ。それで、こう、後藤先生、自分、あの一、7年前のことやけども、これ受け取った折、わし、泣いたと思うんですけども。[「ああ、それねえ、顔がね」（後藤先生発言）] あ一。[「すごく、まあ、喜んでおられるなあ、ゆうの、わかったけど」] うーん。[「まあ、何か、ほんとに、よく持って来て、よかったなあ、いう感じは受けて帰りましたけど…」（後藤先生発言）] そやけに、あの折、自分は、その折、支援物資はいろいろいただくけども、でも、こういう心のこもった、些細なものであっても、自分としては、もう、ほんとに心の御馳走として、あの、ありがたく、涙がでる、今、思い出すんやけども、そのような感じして、してるんです。だから、ほんとに、あの、後藤先生に苦勞かけたなあ、ほんとにお世話になったなあ。ほいで、その当時の小学校2年生、今の中学2、年生かな。[「2年生、3年生です」（後藤先生発言）] 3年生、[「3年生」（後藤先生発言）] の、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちに、ほんとに、この、「おおきに」とお礼を言いたい。だから、今度は、あの一、家の近くで、中学3年生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちに会ったら、この、神戸のジジイが、あの、「おおきによ」と言うといてな。頼むで一。[数名の子どもたちから頷くなどの反応] そやけに、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちには、これはもう、直接言えないから。よろしゅうお願いしまーす。

長谷川さんの語りも、非常に生々しいものである。ただし、少なくとも、庄野さん、浅井さんと比較すると、特定の人物に対する関心を基軸とする傾向は弱い。むしろ、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」にも、その一端があらわれているように、より包括的な集合体——被災者、ボランティアなどの身体（人間）たち、それらの身体たちがその中で活動する空間（被災地）、そして、身体たちの間でとり交わされたモノ（寄せ書き）を含む——を基盤とした語りが基本である。先述の「われわれ」も、こうした脈絡で理解されるべきである。つまり、「われわれ」は、多くの場合、「われわれ被災者」の意味で用いられ、本ケースでも、この言いまわしが2回登場する。これには、家族に犠牲者がなかったという長谷川さんの個人的事情も影響している。さらに、長谷川さんは、避難所リーダー、仮設住宅の役員、そして、語り部活動の開始と、常に被災者全体、被災地全域を意識した活動を積極的に先導してきた人物でもある。こうした個人的背景が、長谷川さんの語りの様式を規定していると見ることができる。

要するに、長谷川さんの語りは、寄せ書きや「後藤先生」を触媒として、「お兄ちゃん、お姉ちゃん」と児童（聞き手）との〈互換〉を喚起し、震災当時の、「われわれ被災者」と「お兄ちゃん、お姉ちゃん」（ボランティア、助けに来てくれた人たち）との関係性を、「われわれ被災者（語り部）」と聞き手たる児童との関係性に重ね合わせ、今に蘇らせようとする営みであると解釈することができる。先に、長谷川さんの場合、「後藤先生」や「お兄ちゃん、お姉ちゃん」が体験語りを駆動する重要なエージェントとして、〈バイ・プレーヤー〉に準じる役割を果たしつつも、最終的には、聞き手そのものが語りの〈バイ・プレーヤー〉であると主張したのは、この意味においてだったのである。

5. 市原さんの語り

(1) 「ドーンというすごい音とともに…」

—— 擬態語の頻用

市原さんの語りを特徴づけるのは、「私（わたし）」（24回登場）の世界に生じた未曾有の体験を描写する擬態語の数々である。擬態語の使用回数は計 22 回

にのぼる。これは、庄野さん（14回）、浅井さん（5回）、長谷川さん（15回）を上まわり、しかも、そのすべてが、S12まで（約12分間）に集中してあらわれる。つまり、この間、聞き手は、30秒に1回、下記のような表現を耳にしたことになる。

で、7年前の、あの朝、さっきの話にもありましたけれども、ドーンというすごい音とともに。私もお布団の中から、ボンと後ろに放り出されていました。（S3）

天井から、なんかバラバラバラバラ落ちてきますし、壁の匂い、土の匂い、何ともわからない匂いがブーンとしてきました。（S4）

電柱にやられたんです。もう、屋根がポコッって、こうやって。で、そのために、バタッと、こう、2階が1階になって……（S6）

擬態語表現の使用は、当事者が、直面する出来事、体験を適切に表現・伝達する言葉を、本人の日常言語体系の中に見いだすことができず、感受した感覚情報をダイレクトに言葉に置き換えていること、つまり、それが言語化困難な体験であることを意味している（矢守, 2001b）。喜多（2002）も、「主体性というものを客観的に語りえない『無主体的な観点』から、その瞬間における事象を『生のままの印象』として捉えられたものが擬音語・擬態語なのである」（p.74）と述べている。実際に、市原さんの語りには、他の3人には見られない豊富な感覚表現（「生のままの印象」）が多数の擬態語とともに盛り込まれている。

ドーンというすごい音（S3, 聴覚）

フライパンの中で、ウイナーソーセージ、こうやってやりますよね [フライパンを扱う動作]、お母さんがお弁当なんかに入れるときに。あの状態で、パーッと振りまわされていました（S3, 体性感覚）

何ともわからない匂いがブーンとしてきました（S4, 嗅覚）

崩れて屋根が、もう、バターっって地面までついて

る家 (S5, 視覚)

その水槽も倒れて足もビシャビシャでした (S7, 触覚)

これらの発話に、本ケースでは言及されていないが、語りの現場で市原さんがしばしば口にする味覚に関するエピソード(「家のまわりで茫然としていると、近所の人がミカンをくれたんです。そのミカンを食べたときの冷たさ、美味しさは、今でも忘れることが出来ません」(神戸市立大沢小学校での語り:2001年1月15日, など類例多数)を加えれば、市原さんにとって、地震が、まさに五感の総体を揺るがす体験であったことが見てとれるであろう。

では、擬態語を中心に、五感に対する総体的衝撃を表現・伝達する市原さんの語りの様式は、何を志向していると考えられるだろうか。まず、通常の言葉を用いた表現・伝達と比較して、擬態語表現は、既存の意味体系への依存度が相対的に弱い表現・伝達だと考えておいてよい。なぜなら、通常という言葉こそが意味体系の中核だからである。ここで、通常という言葉という表現媒体と意味されるものとの関係がシンボル(規約)的であるのに対して、身体の生理機構により密着した擬態語表現は、少なくとも、それと比べてシンボル(規約)性が弱いことが重要である。つまり、「ドーンというすごい音」は、語り手である市原さんと聞き手である児童、それぞれが有する既存の意味体系の壁を越えてユニバーサルに伝播・共有される性質をもつのである。

要約しよう。以上のことは、市原さんの語り、擬態語の頻用という(無意識的)方略に基づいて、以下のことを志向していると解釈することができる。つまり、自らの視点(意味体系)、聞き手たる児童の視点(意味体系)、そのいずれでもない『無主体的な観点』(喜多, 2002)——いずれでもない視点とは、逆説的に、いずれの視点にもなりうるという点が重要である——から描かれるような衝撃的世界、すなわち、震災直後、眼前に開けた世界を、そのまま、今ここに——自らと聞き手の前に——に再生することを市原さんの語りは志向しているのである。

(2) 大好きな「神戸の街」

ここで、もう一つ注目されるのが、市原さんの神戸へのこだわり、である。市原さんの語りには、「神戸」という言葉が、合計20回も登場する。これは、他の3人に比べても際だって多い(庄野さん:6回, 浅井さん:2回, 長谷川さん:9回)。しかも、「神戸」は、単なる地名ではなく、市原さんにとって、そこがかけがえのない土地であることが繰り返し表明される。

神戸の街、行ったことありますか? [ある…(複数の児童の声)] 行ったことある人? [はい(複数の児童の声)] はあ、たくさん、神戸の街、来てくれてるんですね。神戸の街は、すごい綺麗でしょー。(S1)

私も、神戸が大好きで、神戸って、すぐ北っかわに山があります。で、南は海。で、街はすっごくおしゃれなんです。それでもう、ずーと神戸に住んでるんですけども。(S2)

そして、私は神戸が好きで、また神戸に戻ってきました。(S19)

「神戸」に注目して語りの全体を見渡すと、たしかに、「神戸」を軸に、次のような時系列的展開を見せることができる。つまり、神戸に地震なし(S1)、地震前の美しい街神戸(S2)、地震で破壊された神戸(S3~10)、神戸を離れる(S11)、神戸に戻る(S12)、亡くなった神戸の人々(S13~14)、元気になった神戸の街(S15)、心が病気だった神戸の人々(S16)、元気になった神戸の街(S17以降)、という配列である。S16の挿入を例外として、残りはすべて、「神戸」の変容を現実の時間系列に則って描写している。

「神戸」へのこだわりは、ここでの語りでは言及されていない個人的背景からも推察される。まず、ここでは、わずか1分あまりの発話(S11)に縮約されているが、IV-2で述べた通り、市原さんにとって、「神戸」を離れた1年弱の期間は、自宅の全壊と再建へ向けての労苦、多くの知人の死、援助してくれる人々への気遣いなど、非常に辛い日々であった。PTSDと診断され病院通いをしたのも、この時期であ

った。市原さんにとって、「神戸（自宅）」は、「わけもなく、とにかく早く帰りたい」場所だったのである。また、市原さんが、「前向きに生きるきっかけになった」としてあげるモニュメント交流ウォークという活動を推進している被災者グループが、「神戸を元気に」、「がんばろう神戸」などをスローガンに「神戸」の復興を目指していたことも、市原さんに少なからぬ影響を与えたと思われる。

要するに、前項での議論をも踏まえれば、市原さんが五感全体で感受した世界の衝撃は、「大好きな神戸」という空間とそこにあったモノ、そこに住んでいた人々という集合体の総体——市原さん自身がこれを指示する言葉が、「神戸の街（まち）」である——に対する衝撃であったわけである。すなわち、市原さんの語りは、庄野さん、浅井さんのそれとは異なり、特定の人物ではなく、「神戸の街」という集合体全体を〈パイ・プレーヤー〉としていると解釈しうるのである。

こうした解釈は、本稿における語り分析の結果のみに依存する根拠の薄い推論ではないことを付言しておく。経験的にも、また、理論的にも、ここでの主張を支持する先行研究は存在する。例えば、やまだら（1999, 2000）は、本研究と同様、阪神・淡路大震災で親しい友人を亡くした大学生らの語りを時間をおいて2度にわたって収集・分析し、語り手らのライフストーリー（生活世界）に占める「友人の死の経験」の意味の変容について探っている。その中で、やまだらは、市原さんとまったく同様に、「神戸」という場所からの物理的移動、および、そのことに対する意味づけが、ライフストーリー構成の鍵を握っていた若者の事例について報告している。他方、南（1995）は、環境心理学的研究成果のレビューを踏まえて、発達という概念をあてはめる単位として、「状況中の人」を重視し、生活世界は、空間的・時間的・社会文化的な視野のもとに描かれる必要があると述べている。ここで、南が「状況」という概念で指示していることは、（例えば、「神戸の街」という）集合体全体と同値である。集合体が、語りの〈パイ・プレーヤー〉となりうることは、経験的にも理論的にも十分権利づけられていると言えよう。

(3) 神戸と高槻

では、市原さんの語りにおいて、聞き手はどのような位置を占めていたと考えられるだろうか。鍵は、語りの冒頭で提示される次の発話だと思われる。

それでも、ずーと神戸に住んでるんですけれども。一度だけ、私も旦那さんの転勤で高槻に2年間住んだことがあります。高槻もずいぶん変わったんですけれども。まあ、そういう風な関係で、高槻ってすごくなつかしいなあーって思っただけで、やっぱり、皆さん、高槻好きでしょう？ [複数の児童が頷く] ねえ、ずーと高槻好きですよ。私も、神戸大っ好きなんです。(S2)

この発話は、市原さんの視点から見た「神戸の街」——繰り返すが、これには、神戸という空間とそこに存在するモノ、人々が含まれる——と、聞き手である児童の視点から見た「高槻の街」とを並置する働きをもつものである。そして、この並置によって、「神戸」に生きる、あるいは、生きた人々と、児童らが住む高槻に生きる（あるいは、生きた）人々とが対応づけられ、——前節まで用いてきた用語を使って表現すれば——語り手と聞き手を越えて、いくつかの視点の〈互換〉が生じうる。例えば、亡くなった赤ちゃんを抱いて全壊した自宅のまわりを歩き続ける父親（S9）の視点（または、その様子を見つめる市原さんの視点）に立つ児童、あるいは、亡くなった当時中学1年生の少年（S13）になる児童——数多く存在したはずである。この意味で、市原さんの語りも、これまで検討してきた3人の語りと同様、決して語りの内部に閉塞するものではなく外部へと開かれ、聞き手とともにある語りなのである。

VI 総括

1. ライフストーリーの再構成 ——生活世界の再構造化

本研究に登場した4人の語り手（被災者）はいずれも、震災によって、それまでの平穏な生活を、突如と

して、しかも理不尽に断ちきられた人々である。ある日突然、家族を奪われ、多くの知人を亡くし、自宅を破壊され、そして、住み慣れた街を去らねばならないとはどういうことか——筆者自身を含め、共感ということの限りを尽くして、今一度、4人の語りにも耳を傾けたい。

4人は、現在もなお、程度の差こそあれ人生における危機的な境界線上（南，1995）にある。それにもかかわらず、否、だからこそ、4人はG117のメンバーとなって自らの体験（人生）を語る作業を始めたのだと言える。たしかに、ふだんでも、人は、自己の生を言葉で表現せずにはおれない存在ではある。しかし、やまだ（2000b）が強調するように、「人はいつでも人生の物語を必要とするわけではありません。人生を物語るとき、それは自己と他者（あるいは、もう一人の自己）との亀裂や、前の出来事と後の出来事とのあいだの裂け目が大きくなったとき、それらをつなぎ、意味づけ、納得する心のしくみが必要なとき」（p.85）なのである。

すなわち、本研究で検討してきた4人の語り（ナラティブ）は、4人の被災者が、震災の体験を自らの生の中に位置づけるべく展開しているライフストーリーの再構築作業における苦闘の軌跡、でもある。したがって、そこに見られる語りの「様式」のちがいは、単なる発話形式のちがひ、まして、個人的な記憶内容のちがひと見るべきではない。それは、4人の被災者が被災という不幸な出来事を踏まえて自らの生活世界を再構造化（Raphael, 1989；野田，1992；南，1995）しようとする際に依拠する「様式」のちがひを反映していると考えねばならない。

よって、例えば、この4人——敷衍すれば、この4人と類似の「様式」をもつ被災者たち——に対して、外部者（例えば、カウンセラーやボランティア等）が提供する支援活動も、そもそもそれが必要かどうかをも含めて、個々の被災者が現に展開しつつある生活世界の再構造化作業における「様式」を念頭に、徹底的に個別的な分析と対応がなされねばならない。具体的に言えば、長谷川さんには、例えば、G117の活動を支援するボランティア（「お兄ちゃん、お姉ちゃん」）が、市原さんには地元コミュニティ（「神戸の街」）の再生を支援するシステムの整備が、それぞれの生活世

界の再構造化に資すると思われる。しかし、他方、筆者の見るところ、庄野さんや浅井さんにとって、そうした外部からの介入は、少なくとも前2者ほどは重要ではない。少なくとも、現時点では、2人にとって、生活世界の再構造化の鍵は、2人のごく身近にいる〈パイ・プレーヤー〉だからである。よって、2人には、生活世界の外部からの働きかけよりも、むしろ、それぞれの〈パイ・プレーヤー〉との間で、現実的な、あるいは、想像上の〈互換〉を反復することによって〈共通の経験〉を取り戻すための、静かな、しかし着実な時間こそが必要である——もっとも、そうした作業を進捗させるための触媒的場としてG117のような外部エージェントが役立つことはあろうし、筆者もそれを望んでいる。

以上のことを踏まえれば、今後の課題として、「語り直し（re-storying）」の問題が浮上する。すなわち、ライフストーリーの再構築、あるいは、生活世界の再構造化という作業は、われわれの生ある限り、常に進行中の課題——安定状態の維持という課題を含め——だからである。ましてや、4人の語り手は、被災という衝撃的な体験からわずか数年を経たのみである。その語りは、現時点においても変容し続けている。一時点における語りの様式にのみ注目した研究で充足することなく、より長期的なアプローチが求められる所以である。

実際、こうした立場に立った先駆的な研究もいくつか存在する。例えば、先述したように、やまだら（1999，2000）は、本研究と同様、阪神・淡路大震災で親しい友人を亡くした大学生らの語りを2度にわたって収集・分析し、語りの内容の変化過程を分析している。さらに、記念や喪の作業の年次反復——例えば、記念碑や文集を制作し、かつ、一周忌、七回忌などの機会に、それをめぐって人々が周期的に集う営為——も、それが語り直しの重要な契機となる点で重要であろう。これについても、阪神・淡路大震災の被災者が被災地各地に建てられた慰霊のモニュメントを定期的に訪問する行事（「震災モニュメントウォーク」）について分析した今井（1999）や矢守（2001c）などの先行研究がある。幸い、G117の語りの記録は、語り部の活動が長期にわたってきたことを受けて、それ自体がすでに3年以上の月日を刻むに至っている。すなわ

ち、本研究でとりあげた4人を含め、何人かの語りについては、その内容、様式の長期的変化を分析することが可能なデータが蓄積されつつある。今後取り組むべき重要な課題と位置づけたい。

2. 固有の集合性へのアプローチ

本研究では、一貫して、4人の語り部それぞれの固有性、とりわけ、語りの「様式」に見いだされる固有性にこだわってきた。結果として、4人の語りを横断的に位置づけるための鍵概念らしきもの——〈バイ・プレーヤー〉、および、視点の〈互換〉——が提示された恰好にはなっている。しかし、本研究がはじめからこれらを念頭に置いて構築されたわけではないことは、これまでの記述から了解いただけたものと思う。語りの分析は、すべて、個々の語りを繰り返し視聴し、4人の語り部たちと数年間にわたって活動をともにすることによって、——その一端ではあろうが——個々の語り手の生き様を目の当たりにするところから抽出したものである。したがって、筆者は、本研究で提起したある種の枠組みが、そのまま5人目の語り手に適用できるとは考えていないし、いわんや、語り（ナラティブ）研究一般に該当するなども考えていない。とは言うものの、このことは、特定の語りの固有性に注目する研究が、他の諸研究と分断され孤立したケース研究になることを意味するものでは、決してない。同時に、個々の語り手がかつ固有性へのこだわりが、そのまま、個人の心理的特性（内面）への注視につながるわけでも、決してない。最後に、この2点を強調して本稿を閉じたいと思う。

第1に、本論冒頭でも指摘し、かつ、分析の中でも何度か示唆したように、その固有性が追究された4者4様の語りは、理論的な意味でも孤立した分析対象となっているわけではない。むしろ、分析にあたって、本研究では、語り（ナラティブ）に関する種々の研究成果から生成的継承（やまだ、2002）を受けている。例えば、「視点の〈互換〉（特に、庄野さん、浅井さん）」（大澤、1990；楽学舎、2000）、「直接体験の有無と語りの様式の揺れ（特に、庄野さん）」（大橋ら、2002）、「仮定法の語り（全員）」（やまだ、2000b）、「（内的な）対話性・多声性（特に、庄野さん、浅井

さん）」（Bakhtin, 1988; Wertsch, 1995）、「自己物語のパラドックスとその回避（特に、庄野、浅井さん）」（浅野、2001）、「集合体——身体、空間、モノ——と融即した語り（特に、市原さん）」（南、1995；やまだら、2000；矢守、2001a）などの諸研究の成果の延長線上に、本研究はある。固有性に対する追究は、それが、一般的視座、包括的理論への配視を欠くとき、孤立した知識の断片を生むばかりである。

第2に、本分析は、それぞれの語り部固有の特徴を抽出することを目指した点で個別的分析ではあったが、決して、語り手本人に関する個人的分析（心理的分析）に終始したわけではなかった。たしかに、本研究と同じ語り部活動を、社会構成主義の視点（Gergen, 1998；矢守、2001d）に立って、「体験語りをデータとしながらも、そこから人々の共通性」（大橋ら、2002, p.165）を抽出し、「語りの共同体の特性の解明」（同左）を志向した Yamori (in press) とは対照的に、本研究では、「そうした共同体のなかにあってもなお個人的な運動を見せる供述者〔ここでは、もちろん、語り部（引用者）〕の動的な個別性」（同左）に焦点をあてた。しかし、個別性の追究ということが、そのまま個人の内面性に関する心理学的分析と等値されるわけではない。実際、本研究で試みられたことは、むしろ、〈バイ・プレーヤー〉や〈互換〉を鍵概念として、語り手とそれを取りまく人々（生きる者、亡くなった者）、および、彼らが生きる環境（空間・モノ）のすべてに関する集合性の分析であった。すなわち、それは、各人に固有の集合性の分析、言い換えれば、個々の語り部が有する集合性のもつ固有性の分析だったのである。

冒頭で述べたように、筆者は、G117のメンバーでもある。本研究の成果は、今後、グループの実践的活動にも反映されるであろう。「何を話すか」という語りの「内容」にだけ拘泥することはもはやできない。語り手がかつ既存の集合性と、聞き手が持ち込む別の集合性の双方に配視し、語り手と聞き手とが語りの活動を通じて、語り部の現場で新たに構築する新たな集合性の総体を視野に入れた語り部活動を目指していきたいと思う。

注

- *) 本論文に登場する個人の氏名はすべて、当事者の了解を得た上で、実名で記載している。
- ***) 本研究は、平成 12-13 年度科学研究費補助金 (奨励研究 A, 課題番号: 12710084), および、平成 12-14 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C, 課題番号: 12610152) の助成を得て実施されたものである。

引用文献

- 浅野智彦. (2001). 自己への物語論的接近: 家族療法から社会学へ. 東京: 勁草書房.
- Bakhtin, M.M. (1988). ことば 対話 テキスト (ミハイル・バフチン著作集 8) (新谷敬三郎, 訳). 東京: 新時代社. (Bakhtin, M.M. (1986). *Speech genres and other late essays*. C. Emerson & M. Holquist (ed.), V.W. McGee (trans.), Austin: University of Texas Press.)
- Bartlett, F.C. (1983). 想起の心理学 (宇津木保・辻正三, 訳). 東京: 誠信書房 (Bartlett, F.C. (1983). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. London: Cambridge University Press.)
- Bruner, J. (1999). 意味の復権: フォークサイコロジへ向けて (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳). 京都: ミネルヴァ書房 (Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- Gergen, K. (1985). *The social construction of the person*. Berlin: Springer Verlag.
- Gergen, K. (1998). もう一つの社会心理学: 社会行動学の転換に向けて (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀, 監訳). 京都: ナカニシヤ出版. (Gergen, K. (1994). *Towards transformation in social knowledge* (2nd.). London: Sage Publications.)
- 浜田寿美男. (2002). 〈うそ〉を見抜く心理学: 「供述の世界」から. 東京: 日本放送出版協会.
- 今井信雄. (1999). さまざまな「震災モニュメント」が意味するもの. 神戸大学震災研究会 (編), 阪神大震災研究, 4: 大震災 5 年の歳月 (pp.298-312). 兵庫: 神戸新聞総合出版センター.
- 喜多壮太郎. (2002). ジェスチャー: 考えるからだ. 東京: 金子書房
- 小林多寿子. (1997). 物語られる「人生」: 自分史を書くということ. 学陽書房.
- Lewin, K. (1977). 社会的葛藤の解決: グループ・ダイナミックス論文集 (末永俊郎, 訳). 東京: 東京創元社. (Lewin, K. (1948). *Resolving social conflicts: Selected papers on group dynamics*. New York: Harper.)
- Middleton, D., & Edwards, D. (1990). *Collective remembering*. London: Sage Publications.
- 南 博文. (1995). 人生移行のモデル: 人間発達のドラマをどう見るか. 南 博文・やまだようこ (編), 老いることの意味: 中年・老年期 (講座 生涯発達心理学 5) (pp.1-40), 東京: 金子書房.
- 南 博文・やまだようこ. (1995). 老いることの意味: 中年・老年期 (講座 生涯発達心理学 5). 東京: 金子書房.
- 森 直久. (1995). 共同想起事態における想起の機能と集団の性格. 心理学評論, 38, 107-136.
- 茂呂雄二. (1991). 語り口の発生: 言語の活動理論. 無藤隆 (編), ことばが誕生するとき: 言語・情動・関係 (pp.169-220), 東京: 新曜社.
- 野田正彰. (1992). 喪の途上にて: 大事故遺族の悲哀の研究. 岩波書店.
- 大澤真幸. (1990). 身体の比較社会学 I. 東京: 勁草書房.
- 大橋靖史・森 直久・高木光太郎・松島恵介. (2002). 心理学者, 裁判と出会う: 供述心理学のフィールド. 京都: 北大路書房.
- Plummer, K. (1998). セクシュアル・ストーリーの時代: 語りのポリティックス (桜井 厚・好井裕明・小林多寿子, 訳). 東京: 新曜社 (Plummer, K. (1995). *Telling sexual stories: Power, change, and social worlds*. London and New York: Routledge.)
- 楽学舎. (2000). 看護のための人間科学を求めて. 京都: ナカニシヤ出版
- Raphael, B. (1989). 災害の襲うとき: カタストロフィーの精神医学 (石丸正, 訳). みすず書房. (Raphael, B. (1986). *When disaster strikes: How individuals and communities cope with catastrophe*. New York: Basic Books.)
- 桜井 厚. (2002). インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方. 東京: せりか書房.
- 佐々木正人. (1991). 「現在」という記憶の時間. 無藤隆 (編), ことばが誕生するとき——言語・情動・関係 (pp.93-128), 東京: 新曜社.
- 佐々木正人. (1996). 想起のフィールド: 現在のなかの過去. 東京: 新曜社.
- 高木光太郎. (2001). 位置取りと身構え: 体験への心理学的アプローチ. 岡田美智男・三島博之・佐々木正人 (編), 身体性とコンピュータ (pp.47-60), 東京: 共立出版.
- 富山一郎. (1995). 戦場の記憶. 東京: 日本経済評論社.
- 上野直樹. (1999). 仕事の中での学習: 状況論的アプローチ. 東京: 東京大学出版会.

- Wallon, H. (1983). 子どもの精神発達における運動の重要性+解説 (浜田寿美男, 訳編). 身体・自我・社会 (pp.138-148 & pp.208-227). 京都: ミネルヴァ書房.
- (Wallon, H. (1956). *Importance du mouvement dans le développement psychologique de l'enfant.*, Enfance.)
- Wertsch, J. (1995). 心の声: 媒介された行為への社会文化的アプローチ (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子, 訳). 東京: 福村出版. (Wersch, J. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- White, M. & Epston, D. (1992). 物語としての家族 (小森康永, 訳). 東京: 金剛出版. (White, M. & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends.* New York: Norton.)
- やまだようこ. (2000a). 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編著). 人生を物語る: 生成のライフストーリー(pp.1-38). 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2000b). 喪失と生成のライフストーリー: F1ヒーローの死とファンの人生. やまだようこ (編著), 人生を物語る: 生成のライフストーリー (pp.77-108), 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2002). なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか?: 質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承サイクル. 質的心理学研究, 1, 70-88.
- やまだようこ・河原紀子・藤野友紀・小原佳代・田垣正晋・藤田志穂・堀川学. (1999). 人は身近な「死者」から何を学ぶか: 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りより. 教育方法の探究, 2, 61-78, 京都: 京都大学大学院教育学研究科.
- やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美. (2000). 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し. 教育方法の探究, 3, 63-81, 京都: 京都大学大学院教育学研究科.
- 矢守克也. (2001a). 災害体験の記憶と伝達. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文(編). カタログ現場心理学: 表現の冒険 (pp.112-119). 東京: 金子書房.
- 矢守克也. (2001b). 社会的表象としての〈活断層〉: 内容分析法による検討. 実験社会心理学研究, 41, 1-15.
- 矢守克也. (2001c). 記憶と記録の社会心理学VI: 「モニュメント・ウォーク」の試み. 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 138-139.
- 矢守克也. (2001d). 社会的表象理論と社会構成主義: W. Wagner の見解をめぐって. 実験社会心理学研究, 40, 95-114.
- 矢守克也. (印刷中). トランスクリプト: 4人の震災被災者が語る現在. 奈良大学紀要, 31 (2003年3月刊行予定).
- Yamori, K. (in press). The way people recall and narrate their traumatic experiences of a disaster: An action research on a voluntary group of story tellers. (In) Kashima, Y., Endo, Y., Kashima, E., Leung, C. and McClure, J. (Eds.), *Progress in Asian Social Psychology*, Vol.4. Seoul: Kyoyook-kwahak-sa.

(2002.6.28 受稿, 2002.10.18 受理)